

VIEW21

ビュー21

2017

Vol. 2

教育委員会版

特集

小学校英語の 教科化に備える

先行実施に向けた実践アドバイス座談会／文部科学省インタビュー

事例1 群馬県

県内5つの拠点地域を生かして、独自カリキュラムを開発

事例2 東京都町田市

独自カリキュラムと多様な研修で、教員の意識改革を進める

事例3 授業時数確保の工夫を5事例紹介

連載

教委と現場で進める
学力向上へのステップ

岡山県和気町

地域や企業と連携し、
学習環境を整える

主体的・対話的で深い学びを実現！
アクティブ・ラーニング実践講座

福岡県立

輝翔館中等教育学校

協同性重視の活動で
発信力・傾聴力を育む



「ラウンドシステム」の導入により、子どもと向き合う授業を推進

埼玉県熊谷市教育委員会 教育長

野原 晃 のはら・あきら

埼玉大学教育学部卒業。埼玉県上尾市立上尾中学校教諭を皮切りに、埼玉県教育局の指導主事や教育事務所所長、熊谷市内の中学校校長などを歴任し、2005年12月から現職。同県都市教育長協議会顧問。

熊谷市プロフィール

埼玉県北部に位置し、南に荒川、北に利根川と自然に恵まれた、人口約20万人の都市。2019年にはラグビーワールドカップが熊谷ラグビー場で開催される予定で、「おもてなしの心」で迎えようと、現在準備を進めている。

グローバル化が進展する中、多様な他者と交流できるよう、英語を用いた真のコミュニケーション能力の育成が切実な課題となっています。本市でも、2019年のラグビーワールドカップの開催を控え、訪日外国人を温かく迎えたいという思いから、真のコミュニケーション能力を備えた国際人の育成に力を入れています。

その一環として、2014年度に、研究指定校の英語の授業に「**ラウンドシステム**」を試験的に導入しました。これは、教科書を何回も繰り返し使いながら、生徒がコミュニケーション活動に取り組むことで、英語4技能の総合的な定着を目指す学習法です。研究指定校では、授業を視察した教育関係者が「これほど生徒がいっぱい話している授業は初めて見た」と目を見張るほど授業に活気が生まれ、英語の外部検定試験のスコアも、2～3年生にかけて他校より平均で30ポイント前後も高く伸びました。2016年度からは、市内全中学校でこのシステムを取り入れています。

ラウンドシステムは形だけ真似てもうまくいきません。まず、子どもの伸びを意識した評価が重要です。最初は間違ってもよいから、とにかく繰り返して上達すればよいのだと伝えるようお願いしています。また、教員の生徒へのかかわり方が一層重要になります。教員と生徒、生徒同士が「かまひ合う」「向き合う」授業の実現によって言語活動が充実し、真のコミュニケーション能力の育成につながるからです。「子どもと向き

合う時間がない」という声をよく耳にしますが、授業こそが子どもと向き合う大切な時間なのです。

今後は保護者への成果の見える化を図るため、高校入試への対応力を高めていきたいと考えています。埼玉県の進学校で頻出の長文問題に対しては、ラウンドシステムによって量に負けない英語力が育ちつつありますが、さらなる向上を目指し、今後はグレイデッド・リーダーズなどの多読用教材も活用する予定です。

近未来への布石 ラウンドシステム

ストーリー性のある英語の教科書を選び、それを1年生では5回、2・3年生では4回繰り返す。言語習得の自然な流れを重視し、単語や文法などはラウンドがある程度進行してから整理する。

ラウンド(※1)	目標	主な活動
1	概要理解	教科書本文の音声と、ヒントとなるピクチャーカードのみで、教科書本文の概要を理解する。
2	音と文字の一致(※2)	音声を聞きながら教科書の英文を追いつき、音と文字を一致させる。
3	発音の習得	教科書を音読し、その英文をノートに写す(転写)。
4	文構造の習得	教科書の英文に設けられた空欄を埋めながら音読し(穴あきリーディング)、ノートに英文を書いていく。
5	自分の言葉で表現	教科書の内容を自分の言葉で伝え(ストーリーテリング)、その英文をノートに書いて、オリジナルテキストを作成。

※1 2～3か月かけて各ラウンドを終える。 ※2 1年生のみ。2・3年生では「発音の習得」が第2ラウンドとなる。

*熊谷市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

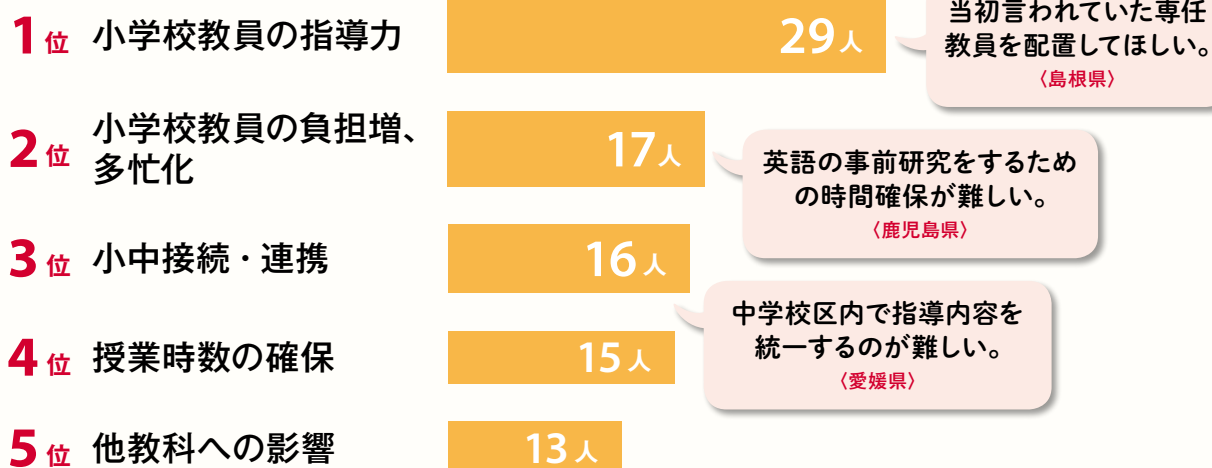
特集

小学校英語の教科化に



2018年度から、小学校では新学習指導要領へ向けて、中学年での外国語活動、高学年での教科「外国語」の先行実施。今回の改訂では、移行措置の実施も決まり、結果的にすべての小学校英語について現場の不安感は強く、特に教員の指導力についての課題意識が強い（下図）。そこで本特集では、新学習指導要領の改訂ポイントやその背景先行して小学校英語の教科化を実施し、試行錯誤してきた自治授業づくりや教員の指導力向上、授業時数確保の3観点で今後のロードマップの描き方を考えていきたい。

Q. 小学校英語の教科化に対して、何に不安や課題を感じていますか？



*上位5つを掲載。

*『VIEW21』教育委員会版 2017年度 Vol.1の読者モニターアンケート結果を集計。回答数 121件。複数回答。



備える

がスタートする。
小学校で対応を取る必要が出てきたが、

を改めて押さえるとともに、
体や学校の取り組み事例を通じて、



つかむ

先進校が実践経験を基にアドバイス

座談会

▶▶▶ P.4

島根県雲南市

- ◎ 中学校区内の英語教育をコーディネートする人材を配置し、「フェードアウト型連携」で、担任が1人立ちできるよう支援。

押さえる

移行措置の詳細と、 2018年度までにすべきことを紹介

文部科学省インタビュー

▶▶▶ P.8

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 国際教育課
教科調査官 直山木綿子

- ◎ 移行措置の授業時数や指導内容はあくまでも最低限。
- ◎ 今後に向けては、各校でCAN-DOリストの作成と、担任の指導力向上のための校内研修を行ってほしい。

動き方を考える

カリキュラム開発と 教員の指導力向上の実践例

事例1 群馬県

▶▶▶ P.12

- ◎ 誰もが同じレベルで授業できるよう、国の事業を活用して独自のカリキュラムを開発。
- ◎ 5つの拠点地域の成果を県内全域に広げる仕組みを構築。

事例2 東京都町田市

▶▶▶ P.16

- ◎ 地元の大学と連携し、小学校中学年向けのカリキュラムを開発。
- ◎ 様々な研修を用意し、現場教員の指導力向上を支援。

先進校5校に見る授業時数確保の工夫ポイント

事例3

▶▶▶ P.20

- ・ 島根県雲南市立吉田小学校
 - ・ 東京都武蔵村山市立第三小学校
 - ・ 徳島県阿波市立伊沢小学校
 - ・ 東京都町田市立本町田東小学校
 - ・ 群馬県太田市立旭小学校
- ◎ ① 45分授業2コマ確保、②モジュールの活用、③モジュールと45分授業の併用の3パターンについて、それぞれのメリット・デメリットを検証。

英語教育をコーディネートする人材の配置で担任が1人立ちできるように支援を

2018年度から小学校英語の先行実施を始める教育委員会や学校は、様々な不安や課題を抱えているのではないだろうか。そこで、文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、2014年度から小学3～6年生で英語教育を進めている島根県雲南市立吉田小学校と、共に事業を進める同市立吉田中学校の先生方に、経験を基にアドバイスをいただいた。小・中学校2人の先生は英語教育推進リーダーとして事業推進の中心的存在であり、吉田中学校の勝部由紀夫校長は島根県中学校英語教育研究会会長として、島根県教育委員会や雲南市教育委員会とともに事業をサポートしてきた。その3人の先生方に、小学校英語の授業づくりのポイントや教員の指導力向上と意識改革の進め方などについてうかがった。

成功する授業づくりのポイントとは？

小・中の接続を円滑にする「スタートプログラム」

——まず、雲南市が進める事業の特色を教えてください。

勝部校長（以下、勝部） 市内の吉田町にある小学校2校と中学校、及び近隣の島根県立三刀屋高校が事業指定を受けています。指定を受けた小・中学校はいずれも小規模校で、特に小学校2校は複式学級があるため、事業でも複式学級における英語教育と小・中・高の円滑な接続をテーマに研究を進めています。

村尾先生（以下、村尾） 小学校では、英語の授業を、中学年が活動型の年

間35時間、高学年が教科型の年間70時間実施しています。具体的には、複式学級であることを踏まえ、他教科と同様に2学年が同じ内容を学び、スパイラルに2回学ぶことで力を伸ばせるよう指導計画を立てています。さらに、地域を題材とした副教材「すてきがいっぱい吉田町 世界に伝えたいわたしたちのふるさと」を作成して小・中で継続的に活用したり、小・中・高をつなぐCAN-DOリストを作成したりしてきました。

高田先生（以下、高田） 中学校では、小・中の円滑な接続を図ろうと、入学直後に約10コマ分の「スタートプログラム」を始めました。小学校で

たくさん触れてきた英語の音と文字について、絵カードやアルファベットカードを使ったフォニックスなどを通して、そのルールを体系的に理解させています。プログラムの最後に、初めて聞いた簡単な英単語を書き取るテストを行います。初年度には半数、2年目には8割もの生徒が正しく書き取れていました。小学校でたくさんの英語に慣れ親んでいるからこそその成果であり、年々新入生の英語力の高まりを実感しています。

勝部 そのほかでは、中高連携にも力を入れています。例えば、中・高でベネッセの「GTEC」*を活用した合同報告会を年1回実施しています。

今回登場いただいた自治体 & 学校プロフィール

島根県雲南市

◎ 2004（平成16）年、6町村が合併して誕生。島根県の東部に位置し、市内吉田町には、日本古来の製鉄法である「たたら製鉄」の遺構があり、国の重要文化財に指定されている。

人口 約3万9,700人 面積 553.2km²
公立学校数 小学校15校、中学校7校
児童生徒数 2,803人
電話 0854-40-1072
URL <http://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/kosodate/syugaku/kyouikuinkai/>

雲南市立吉田小学校

◎ 1874（明治7）年開校。完全複式学級。ふるさと教育に力を入れ、「総合的な学習の時間」では小だたらを操業し、児童は自分たちで集めた砂鉄からナイフを作る。

校長 坂田英則先生
児童数 34人
学級数 4学級（うち特別支援学級1）
電話 0854-74-0017
URL <http://shimane-school.net/unnan/yoshida-sho/>

雲南市立吉田中学校

◎ 1947（昭和22）年開校。校訓は「創造 敬愛 協同 剛健」。吹奏楽コンクール、英語スピーチコンテストや弁論大会で上位の成績を収める。

校長 勝部由紀夫先生
生徒数 24人
学級数 5学級（うち特別支援学級2）
電話 0854-74-0140
URL <http://shimane-school.net/unnan/yoshida-chu/>

ご案内

平成26～29年度 文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」外国語科・外国語活動実践研究成果発表会
日時 2017年10月18日（水）、19日（木）会場 雲南市立吉田小学校、同市立吉田中学校、島根県立三刀屋高校ほか
内容 小・中・高の公開授業と研究協議会、文部科学省教科調査官の直山木綿子氏による講演

* ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」「話す」の4技能を測る。



雲南市立吉田中学校 校長

勝部由紀夫 かつべ・ゆきお

島根県公立中学校教諭を経て、現職。
島根県中学校英語教育研究会会長も務める。



雲南市立吉田中学校

高田純子 たかた・じゅんこ

英語科主任。2015 年度から島根県英語教育推進リーダー。島根県中学校英語教育研究会事務局長も務める。



雲南市立吉田小学校

村尾亮子 むらお・りょうこ

2014 年度から、英語教育コーディネーター、及び島根県英語教育推進リーダー。専門は英語科、特別支援教育。

3つの工夫で、活動の必然性や目的意識を高める

——子どもの英語力を伸ばすために、どのような工夫をされていますか。

村尾 当初は子どもたちの興味・関心を高めようとゲーム中心の活動を行っていましたが、年度末に事業の検証をした際、年度当初から英語力がかなり低いまま伸びない児童がいて、その子は意欲の面でも消極的な回答をしていることが分かりました。その原因を探ると、ねらいや必然性が弱いため、楽しそうにゲームをしてもすぐに飽きてしまったり、ゲームの成果に固執しがちだったりすることが明らかになりました。

高田 そこで、これらの課題を踏まえ、

- ①単元目標から逆算して授業を設計する「バックワードデザイン」
- ②子どもも教員も学習の見通しが持てる授業スタイルの確立
- ③学びの足跡が見える1単元1枚の「振り返りカード」の運用

の3点を導入することにしました。

村尾 1つめのバックワードデザインでは、まず単元目標を明確にし、その到達のためにどのような活動が

必要かを考え、単元計画と授業案を作成しています。本県のCAN-DOリストは単元目標からボトムアップで学年の到達目標を作成しているのが特徴で、それを基に2016年度に小学校でもCAN-DOリストを作成しました。明確になった到達目標を授業案に示すことで、それぞれの活動のねらいも見える化され、何のために活動しているのかを、子どもと教員とが共有できるようになりました。

高田 子どもたちの様子を見てみると、常に目標を意識して取り組んでいて、一つひとつの活動が意味のある積み上げになっています。さらに、目標が明らかになったことで、評価基準も明確になり、授業中の観察、パフォーマンス評価、振り返りカードの分析などを組み合わせて評価できています。小・中ともに同じ考え方で授業づくりをし、目標・指導・評価が一体化したことで、指導の見直しも行いやすくなりました。

——あとの2つは、具体的にどのような取り組みですか。

村尾 2つめの授業スタイルの確立では、ユニバーサル・デザインの考え方を取り入れ、授業の1コマの進

め方を「ウォームアップ」→「デモ」→「アクティビティ」→「振り返り」に固定しました（P. 6図1）。担任は指導への不安が少なくなり、子どもは活動の見通しを持って、安心して授業に取り組めるようになりました。

高田 この方法も小・中が統一することで、中学校入学後の学習にスムーズに移行できています。また、これらをより効果的に進めるために取り入れたのが、3つめの工夫「振り返りカード」（P. 7図2）です。単元を通した学びが見通せ、さらに自身の成長や課題を感じ取れるよう、1単元を1枚のカードにしています。

村尾 子どもたちが書いた内容を見ると、中学年ではゲームの結果や出来栄えについて書くことが多いのですが、学習が進むにつれて、自身の英語使用についての振り返りや新しく知ったフレーズについてのコメントが増えてきています。

勝部 これらの工夫は、すべての子どもにとって分かりやすい授業づくりのための重要な要素と言えます。特にバックワードデザインや授業スタイルの確立は、他教科の授業でも取り入れる動きが進んでいます。

先生方の不安解消や意識改革をどのように進めるか

指導では、英語力よりも子どもへの深い理解が重要

——先生方の指導力や英語力への不安に、どのように対応されたのでしょうか。専科教員やALTに任せるべきという声もありますが……。

勝部 本市では、4人のALTが小学校の英語の授業に入るため、授業をALTに任せてしまうこともありましたが、しかし、全面実施が始まると、ALTがどの授業にも入ることは無理です。そこで、担任の先生が1人でも授業をできるようにするため、村尾先生たち加配の先生を、英語専科ではなく、英語教育コーディネータとして配置していただきました。当初はコーディネータが全面的に授業

に入っていました。今は基本的にT2として授業でのかかわりを徐々に減らし、授業案の作成、教材や教具の提案、授業の補助などを行い、最終的に担任が1人立ちできるよう支援しています。本事業では「フェードアウト型連携」と名づけ、担任、ALT、英語教育コーディネータが役割分担を明確にしています。

村尾 先生方の英語アレルギーはかなり強く、特に話すことへの抵抗感が大きいようです。英語科教員の免許を持っている私ですら、久しぶりに英語を話すことに抵抗がありました。でも、先生方の授業を見ていて思うのは、子どもに教えなきゃと気負わずに、1つでも多くのクラスルーム・イングリッシュを使おうとして

いる先生ほど、子どもも伸びるということです。「先生も英語を話すのは苦手だから、みんなと一緒にできるようにになりたい。できないところは一緒にALTに教えてもらおう」という姿勢で頑張る先生の姿を見れば、子どもも失敗を恐れず積極的に取り組みます。大切なのは専門性より指導力です。人とコミュニケーションする力を育むには、子どもたちを深く理解している担任の先生が授業を行うのが一番で、指導力のあるベテランの先生にこそ、英語の授業をしてほしいと思います。本校では、毎日少しずつでも使えるクラスルーム・イングリッシュを増やしてもらおうとリスト化し、ALTと一緒に職員朝礼で3分間の練習をしています。

高田 確かに、授業は英語力を身につけるだけの場ではありません。ALTも専科の先生も、小学校教員の実情や特性を十分に理解した上で、授業を共ににつくってほしいと思います。



重要なのは指導力。
子どもを深く理解している担任の先生にこそ、
英語の授業をしてほしい。

雲南市立吉田小学校 英語教育コーディネータ **村尾亮子**

仕組みづくりや人的配置で教育委員会は現場の支援を

——教員の負担増には、こういった対応が有効だと思われますか。

村尾 授業の目標を見える化し、授業の進め方を教えやすく学びやすいよう構造化して、固定化したことは非常に効果的で、先生方の不安感を小さくしていると思います。指導内容を本当に必要なものに絞り込み、自信を持って指導できる活動とし、目標と評価方法を確立し、先生方に「これならできそう」「やってみたい」と実感してもらえることが大切です。

高田 その支援ができるよう、この事業では研究組織を整備し、小・中・高で連携を深めています。例えば、

図1 1単元、1時間の授業の流れ

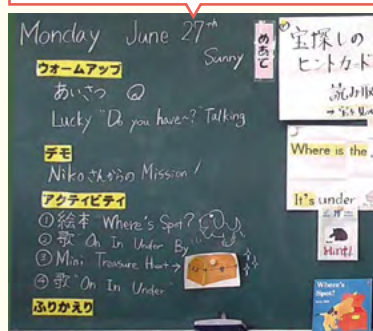
1単元の流れ (6時間単元の場合)

- ① 英語や文化への気づき
- ② 英語表現の慣れ親しみ
- ③ 会話表現での慣れ親しみ
- ④ 会話表現・文字への慣れ親しみ
- ⑤ 友だち同士での会話またはスピーチ
- ⑥ 単元末の発表・単元の振り返り

1時間の流れ

- ① ウォームアップ (挨拶、歌、ラッキーフリートーク*など慣れ親しむための常活動)
- ② デモ (単元や本時のゴールを示し、子どもに学習への見通しを持たせる)
- ③ アクティビティ (めあてを達成するためのメインとなる活動)
- ④ 振り返り (振り返りカードの記入。本時を総括した評価の場)

1時間のめあてや学習の流れを黒板に見える化



授業の進め方、本時のめあて、活動内容を黒板に張り出しておき、子どもも教員も先を見通しながら活動できるようにしている。

* 2～3分間、子ども同士や子どもと教員の間で、既習の表現を使って自由に会話をする活動。

村尾先生と私は、2015年度から週1回、約2時間の打ち合わせをして、情報共有や課題の検討を行っています。その中で「振り返りカード」などのアイデアが出てきたり、評価軸をそろえたりして、中1ギャップが生じないようにしてきました。

勝部 新しい取り組みを成功させるためには、管理職や教育委員会による仕組みづくりや人的配置が必要です。できれば**中学校区ごとに英語の授業をコーディネートする先生を配置することが望ましい**と考えます。

コミュニケーション力だけでなく、教員の指導力も高まる

——「なぜ英語教育を小学校から行うのか」「小学校ではまず国語が大事ではないか」という声もありますが、それについてどう思われますか。

村尾 低学齢であるほど、子どもは聞いたとおりの英語をそのまま発音し、活動も素直に意欲的に行います。そうした姿から、早期に英語活動を行う必然性を感じています。また、3年生からコミュニケーション活動を継続的に行うことで、人の目を見て話す、相手意識を持つなど、人とかわる力が卒業までかなり積み上がっています。例えば、あいさつ



中学校区に英語の授業をコーディネートする人材を配置して、担任が1人立ちできるように支えてほしい。

雲南市立吉田中学校 校長 **勝部由紀夫**

ALTも専科の先生も、小学校教員の実情を理解し、共に授業をつくるのが大切。

雲南市立吉田中学校 英語科主任 **高田純子**



やりアクションなど、最初は英語で始めたことが、日常生活でも日本語で自然にできるようになりました。

勝部 中学校でも拠点事業を始めてから、合唱での伸びやかな歌声や体育での多彩な創作ダンスなど、生徒の表現力が全体的に高まっていると感じています。さらに、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の結果からは自己肯定感の高まりも見られます。活動を通して、小学校時代からコミュニケーション力や表現力を高めてきた成果だと捉えています。

——先生方の足並みをそろえるのは難しかったのではないですか。

村尾 子どもも教員も初めての取り組みだったからこそ、自己流ではなく、知恵を出し合い、丁寧に授業づくりをしてきました。そして、統一した形で授業が行えるようになりま

した。その背景には、拠点事業を成功させたいという思いのほかに、子どもたちにコミュニケーション力をつけさせたいという共通の思いがあったからだと思います。そうした授業づくりは現在、他教科にも大いに生かされています。

——先生方の意識も大きく変わったのですね。

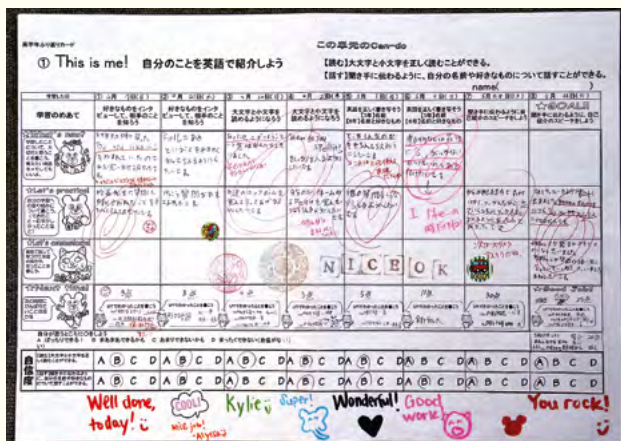
高田 中学校教員も、小学校と同様に、子ども中心に「なぜ？」を大切にする指導への意識改革やバックワードデザインの導入など、他教科でも授業改革の気運が高まっています。

勝部 本事業の目標は、担任が1人で授業を行えるよう、指導力と英語力を高めることです。その目標が達成されつつある今、このノウハウを市や県全体に伝えていきたいと思います。

◎座談会を終えて

事業指定4年目を迎え、担任が英語の授業を行う意義や指導力の大切さを実感している様子がうかがえた。これから本格的に小学校英語に取り組む先生方には、雲南市で見られたような成果を信じて、失敗を恐れずに取り組む姿勢が必要だ。そして、教育委員会には、そのように現場が取り組めるよう、仕組みや人的配置などの面で支援することが求められる。次ページからは、そのヒントとなる事例やアドバイスを紹介していこう。

図2 「振り返りカード」(例)



- 1単元の振り返りシートとし、単元の目標と技能別の到達目標を示す。
- 授業ごとのめあてを示し、学習内容、自身の取り組み、次時の目標などを書き込む欄がある。
- 小・中のつながりを考え、フォーマットは小・中共通だ。

小学校外国語教育を担う担任の指導力向上のため、校内研修の徹底を

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 国際教育課
教科調査官 直山木綿子

新学習指導要領の全面実施に向けて、
2018年度から、小学校は2年間、中学校は3年間の移行期間が設けられている。
移行期間中、小学校外国語教育ではどのような指導を行う必要があり、
教育委員会や学校はどのように対応すればよいのか、文部科学省の担当官に聞いた。

移行措置の内容

移行措置の授業時数や内容はあくまでも最低ライン

対象学年

来年度から始まる新学習指導要領の移行期間において、小学校中学年の外国語活動、高学年の教科「外国語」の準備がスムーズにスタートできるよう、文部科学省（以下、文科省）では学習指導案の提示や教材の準備などを急ピッチで進めています。そうした中で今回、新学習指導要領への円滑な移行のため、全小学校で移行措置を行うこととしました。

新学習指導要領の全面実施は、小学校で2020年度、中学校で2021年度に始まるため、例えば、現在の小学5年生は、2021年度に中学3年生となり、新学習指導要領での授業を受けることになります。新学習指導要領の中学校の英語では、語彙数が現行の1200語から1600～1800語程度に増え、現行では高校で学習している仮定法や現在完了進行形、感嘆文が下りてくるなど、学習内容が増えます。全面実施後の中学3年生の1年間で、増加部分を学習するのは難しいでしょう。

そこで、2018年度から移行措置



なおやま・ゆうこ 京都市の中学校で英語科教諭を務めた後、京都市教育委員会指導主事として小学校外国語活動のカリキュラム開発に携わり、2009年から現職。『Hi, friends!』の開発を担当し、全国各地で研修や講演を行う。著書に、『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』（東京書籍）など。

を行い、2021年度から中学校で無理なく全面実施が行えるための内容を、必修で取り扱うこととしました。今回は、この移行措置対応が現小学1年生まで必要となります（図1）。

授業時数

移行措置に伴い、授業時数も、中学年は年間15時間、高学年は現行の年間35時間に15時間を加えた年間50時間としました。本来は、全面実施後と同様に、中学年で年間35時間、高学年で年間70時間の授業をしていたいただきたいのですが、急な授業時数の確保が難しいことから、必修で取り扱う内容を最低限に絞り込み、それに応じた時数としました。

この増加分の時数確保については、年間15時間を超えない範囲で「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）

図1 2017～2022年度の児童・生徒が受ける外国語の教育課程の状況

年度	2017	2018	2019	2020	2021	2022
小学校		移行期間	移行期間	全面実施	全面実施	全面実施
中学校		移行期間	移行期間	移行期間	全面実施	全面実施
高校						全面実施
2005年度生まれ	小6	中1	中2	中3	高1	高2
2006年度生まれ	小5	小6 (+15→50時間)	中1	中2	中3	高1
2007年度生まれ	小4	小5 (+15→50時間)	小6 (+15→50時間)	中1	中2	中3
2008年度生まれ	小3	小4 (+15時間)	小5 (+15→50時間)	小6 (70時間)	中1	中2
2009年度生まれ	小2	小3 (+15時間)	小4 (+15時間)	小5 (70時間)	小6 (70時間)	中1
2010年度生まれ	小1	小2	小3 (+15時間)	小4 (35時間)	小5 (70時間)	小6 (70時間)
2011年度生まれ	年長	小1	小2	小3 (35時間)	小4 (35時間)	小5 (70時間)

2022年度の高1から
年次進行で実施
すべて旧課程

新課程の
増加分に
ついて、
フォローが
必要

小3から新課程

中学校の外国語の授業時数は現行と同様。年間140時間程度。ここでの「時間」は「単位時間」（45分）を指す。
*文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会（第4回）」配付資料を基に編集部で作成。

図2 移行措置で必ず扱う事項、題材（案）と主な事項（抜粋）

■移行措置で必ず取り扱う事項

◎3・4年生

- ① 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむ。
- ② 日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く。
- ③ 聞くこと及び話すこと〔やり取り〕〔発表〕の言語活動の一部。

◎5・6年生

- 現行の外国語活動での規定事項に加えて、下記を必ず取り扱う。
- ① 音声、活字体の大文字と小文字。
- ② 文及び文構造の一部。
- ③ 読むこと及び書くことの言語活動の一部。

	題材（案）	移行措置で必ず扱う主な事項
3年生	世界の言語	・ 様々な言語があることに気づく
	好きな色、好きな物	・ 日本語との音声の違いに気づく ・ 英語の表現に慣れ親しむ
	アルファベットの大文字	・ 文字の読み方に慣れ親しむ
	身の回りの物	・ 日本語との言葉の成り立ちの違いに気づく ・ 2往復以上のやり取りを経験する
	人・動物	・ まとまりのある話を聞いて分かる
4年生	天気と遊び	・ 様々な動作を表す語に慣れ親しむ
	持ち物・文房具	・ 2往復以上のやり取りを行う
	アルファベットの小文字	・ 文字の読み方に慣れ親しむ
	学校・教室	・ 様々な動作を表す語を使って道案内する
	日課	・ まとまりのある話を聞いて分かる
5年生	アルファベットの文字・自己紹介	・ 英語の文字の認識を深める
	行事・誕生日	
	学校生活・教科・職業	
	1日の生活	
	できること	・ 文字の音に気づく ・ 第三者を紹介する
	位置と場所	・ 文字の音に慣れ親しむ ・ 簡単な語句を読んだり書き写したりする
	料理・値段	・ 丁寧な表現を使って依頼したり応じたりする
6年生	あこがれの人	・ その場で考えながらやり取りをする
	自己紹介	・ まとまりのある話を聞いて意味を理解する
	世界で活躍する日本人	・ 語順や日本語との語順の違いに気づく
	住んでいる町・地域の将来	・ 語と語の区切りに注意して書き写す
	夏休みの思い出	・ 過去の表し方を知り、過去のことを伝え合う
	小学校6年間の思い出	・ 過去のことを伝え合う
	中学校生活	・ 中学校でやりたいことを伝え合う

*文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会（第4回）」 配付資料を基に編集部で作成。

の授業時数を充てられることとしました。これは、「必ず総合学習の時間を充てる」ということではありません。土曜日や長期休業中に授業を行ったり、短時間学習にして組み込んだりしてもかまいません。その判断は、教育委員会や各校に委ねられます。ただし、総合学習以外の教科等の時数を減らすことは認められていませんので、注意が必要です。

移行期間中の授業時数は、あくまでも最低ラインです。現在、それ以

上の授業時数で外国語教育を実施しているのなら、移行期間中、この時数に合わせて減らす必要はありませんし、できればこの時数以上に授業を行っていただきたいと考えています。

指導内容

移行措置における学習内容は、次の通りです（詳細は図2参照）。3・4年生では、これまで高学年で行ってきた外国語活動を通して、外国語への慣れ親しみを主に行います。5・6年生では、これまで行ってきた内

容に加えて、大文字・小文字の識別をしたり、単語や文章を書き写したり、代名詞（he、sheなど）、動名詞、過去形などの基本的な文や文構造を扱ったりします。

これらは、必ず取り扱うべき最低限の内容であり、これ以上の事項を学習してもかまいません。

なお、今回は新学習指導要領に対応した教材を国が作成し、高学年は年間70時間分を9月頃、中学年は年間35時間分を12月頃に何らかの形で公開する予定です（P.10図3）。

文字指導のねらい

読み書きが入っても指導法の基本は変わらない

新学習指導要領で加わる文字指導は、移行措置でも必ず取り扱う内容としました。これまでの外国語活動にはないため、どう指導すればよいのか、戸惑う先生が多いと思います。

文字指導の目標は、大文字と小文字を「識別できる」「読める（発音できる）」「4線上にきちんと書ける」の3つです。これらの内容をドリル学習のように教えるのではなく、まずは読んだり書いたりする必然性のある場面を設定し、その中で読んだり書いたりする活動を通して学習することが重要です。

とはいえ、難しく考える必要はありません。例えば、「文字カードをもらって、自分のネームカードを作る」という活動があります。子どもはお店で“Do you have “S”?” “Yes, I do. How many “S”?”といったやり取りをして自分の名前に必要な文字カードをもらい、台紙に貼ります。そして、完成した台紙を参考に、自分の名前をワークシートの4線上に書きます。

この活動は、「話す・聞く」を体験する買い物ごっこに、「読む・書く」を加えたもので、先ほど説明した「識

図3 2017年度からの小学校外国語教育に関する新教材などのスケジュール

年度	月	取り組み	概要
2017	6月	小学校新教育課程説明会	・年間指導計画例案・活動例案（暫定版、3～6年）、学習指導案例（暫定版、3～6年・各1単元）、児童冊子・指導書（編集原稿・暫定版、3～6年・各1単元）、研修ガイドブック（一部）を配布及び各データの共有
	7月	データ共有	・研修ガイドブック（全体版）のデータ共有
	8月	新教材の需要数調査実施	・配布する新教材の数を確定させるため、先行実施の実施予定状況を確認
	9月	データ共有	・児童冊子・指導書（印刷原稿、5・6年全単元）、学習指導案例（5・6年全単元）のデータ共有
		新教材説明会（9/21）	・新教材の活用及び指導法等について伝達
	12月	データ共有	・児童冊子・指導書（印刷原稿、3・4年全単元）、学習指導案例（3・4年全単元）、デジタル教材（5・6年）のデータ共有
	1月	データ共有	・デジタル教材（3・4年）のデータ共有
		連絡協議会	・研究校における取り組み事例等について紹介
	2月	教材の送付	・児童冊子・指導書・デジタル教材（完成版、3～6年）を各校に送付
2018	4月	新学習指導要領移行措置及び先行実施による授業開始	
2019	5月		
2020		新学習指導要領全面实施	

＊文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会（第4回）」配付資料を基に編集部で作成。

別する」「読む」「書く」という3つの要素がすべて入っています。活動を通して英語に慣れ親しませるという意味では、従来の外国語活動の指導方法と基本は変わりありません。

文字指導を加えた理由には、中学校での英語学習のつまずきポイントとして、音と文字が一致しないことがあるという英語特有の事情があります。例えば、「A」には、[ei] という名称の読み方のほかに、[æ] という読み方があります。新教材の年間指導計画では、5年生のある単元で、文字には名称と音の2種類の読み方があることに気付かせることを目的として、ジングル*やチャンツなどの活動を取り入れました。そうして徐々に発音と文字の関係を理解しておけば、中学校で英語学習が始まる際に、いいスタートが切れることにつながるでしょう。このような気付きへの指導は、小学校の先生方が得意とするところだと思います。

これらを踏まえて、新学習指導要領では、中学校において発音とつづ

りの関係を学習します。この学習の前提として英語をたっぷり聞いたり話したりしていることが重要なのです。また、実際に使う場面がないと、単なるルール覚えになってしまい、知識が内在化しません。

もう1つ、英語が苦手な中学生には、単語と単語の間にスペースを空けずに書く傾向が見られます。これも、英語では単語ごとにスペースを空けるという、日本語にはない特性が影響しています。しかし、これでは単語の区切りが分からず、学習がしづらくなります。この対策として、まず単語を見て書き写し、次に文を見て書き写すことで、単語の区切りに気付かせる活動を、高学年で取り入れることとしました。

このように、中学校でこれまであまり手をつけてこなかった部分を扱うことが、小学校外国語教育の役割でもあります。先生方からは英語指導の専門性や英語力がないことについての不安をよく耳にしますが、全教科等を指導し、子どものことをよく知っ

ていることに自信を持って取り組んでいただければと思います。

今後どう動くべきか①

まずは各校でCAN-DOリストの作成を

数値による評価をどう行えばよいのかという声も、よく寄せられます。評価の具体的な内容や方法については今後、文科省で検討を進め、随時公表していく予定です。なお、移行期間中は、現行の指導要領に準じます。

まずは、授業をどうつくるかが大切です。学習到達目標をしっかりと定め、そのための適切な活動を設定すれば、おのずと評価のあり方は見えてきます。目標・指導・評価の一体化を目指して、日々取り組んでいただきたいと思います。

そのために、各校にまずお願いしたいのが、CAN-DOリストの作成です。研究拠点校での実施状況から、CAN-DOリストは年間指導計画や単元計画の作成に生かしたり、教員間や児童との目線合わせに活用したり、評価に使ったりと、多方面で有効なことが分かっています（図4）。まだ作成していない学校は、新学習指導要領の目標を参考に、それらをより具体化して、自校の実態に見合った学習到達目標となるCAN-DOリストを作成していただきたいと思います。

今後どう動くべきか②

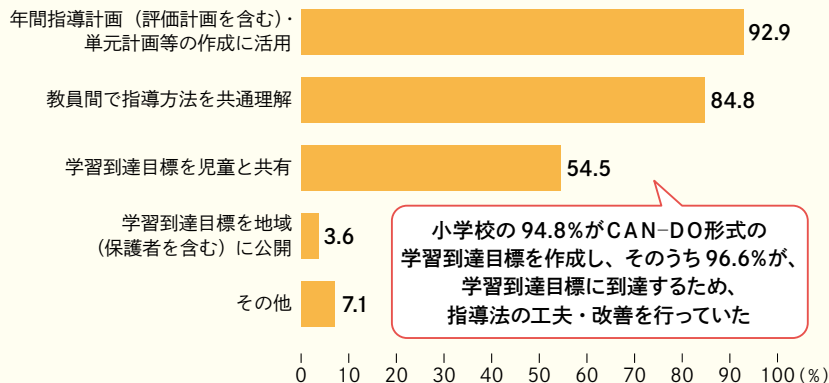
担任の指導力向上のため校内研修の徹底を

先生方が指導で戸惑いやすいポイントについては、文科省が行う中央研修などでフォローしています。これらの研修内容を現場の先生方と共有する場として、各校では、校内研修を今年度中に必ず実施してください。文科省では7月に校内研修で活

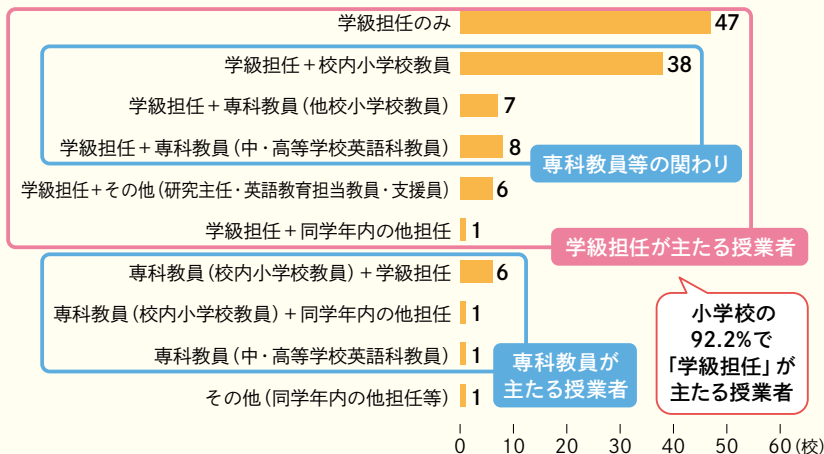
* アルファベットごとに口の形や舌の動かし方を覚えさせるための唱え歌。

図4 「英語教育強化地域拠点事業」の研究拠点校に見る先進校の取り組みの傾向

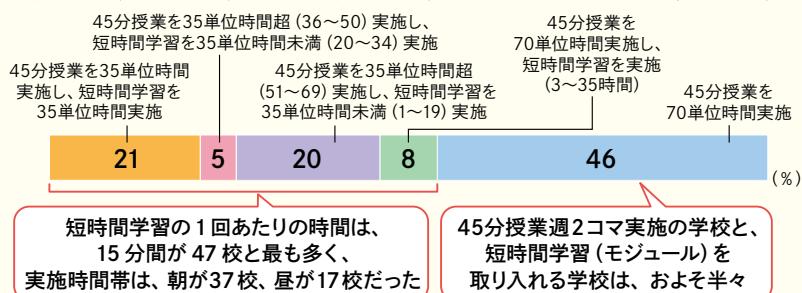
「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の活用状況



5・6年生の授業者



教科型（5・6年生）の年間授業時間（年間70時間以上実施する学校）



*文部科学省「平成28年度英語教育強化地域拠点事業における取組状況（案）」を基に編集部で作成。
文部科学省が2014年度から行う「英語教育強化地域拠点事業」の小学校116校の2016年度の状況。

のように学んだ子どもが上がってくるのか、共通理解を図る必要があります。小・中の研究授業の日程を告知して、授業参観を呼びかけるなど、教育委員会にはぜひ小中連携も主導していただきたいと思います。

今後への期待

英語教育の出発点を担うという意識を持って

研究拠点校など先行して小学校外国語教育を推進してきた学校では、先行事例が少ない中で苦勞して指導法を確立されてきました。その努力に敬意を表したいと思います。ただ、導入を急ぐあまり、子どもが英語嫌いになっていないか、新学習指導要領を改めて読み返しなが、指導を再点検していただければと思います。

語学の習得は、学校教育だけで完結するものではありません。将来的に長く学び続けられるようになるには、何より「英語が好き」という気持ちを育むことが大切で、今回の英語教育改革は、いかに子どもが楽しく学習できるかという観点で進められてきました。それには、先生が子ども一人ひとりの様子を観察し、意欲を高めていく必要があります。そうした指導は、小学校の先生方の得意とするところでしょう。伝え合う活動などを通して、小さな成功体験を積み重ねることを大切にしてください。

言葉で伝え合うことは、他者理解の重要な手段の1つです。外国語を使いこなせるようになるという外国語教育の先には、世界平和があると考えます。世界中の人と交流できるようになることで、市民レベルから世界平和の実現に結びつくと思うのです。小学校外国語教育は、そうした素晴らしい教育の出発点を担うのだということを意識して、先生方には指導していただければと思います。

用できる『研修ガイドブック』をホームページに公開しました。

地域や学校によっては、校内研修があまり行われていないところがあると聞いています。管理職は小学校外国語教育の重要性を十分認識し、人的配置や研修の時間を確保する必要があります。教育委員会は、場合

によっては管理職向けに研修を行うなど、引き続き各校に強く働きかけていただきたいと思います。

また、小中連携も今まで以上に大切になります。小・中の教員を互に行き来させて、小学校教員には今の指導が中学校での学習にどうつながるのか、中学校教員には小学校でど

誰もが同じレベルで授業できるように 国の事業を活用してカリキュラムを開発

群馬県

2014 年度に県内 3 地域が文部科学省から「英語教育強化地域拠点事業」に指定された群馬県では、地域バランスを考慮して、県独自でもさらに 2 地域を拠点地域に指定。県内 5 つの拠点地域を中心に、小学校向けの独自カリキュラムの開発や教員研修などを、県教育委員会主導で行ってきた。さらに、研究の成果を県内全域に広げるために様々な仕組みを構築し、英語教育の浸透を図っている。

群馬県教育委員会の施策

国の指定に加えて、県独自でも拠点地域を指定し、 県内 5 地域の研究成果を効果的に県内全域に広げる



教育長 笠原 寛 かさはら・ひろし

北海道大学法学部卒業後、群馬県庁に入職。群馬県病院局長、群馬県企画部長等を経て、2016 年度から現職。

群馬県プロフィール

◎関東平野の北西部に位置し、数多くの温泉など豊かな環境に恵まれる。古代には東国文化の中心地として栄え、歴史文化遺産が豊富。2014 年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録された。

人口 約 197 万人 面積 6,362km²

公立学校数 小学校 308 校、中学校 161 校

児童生徒数 15 万 4,005 人

電話 027-226-4521

URL <http://www.pref.gunma.jp/03/x0110001.html>

取り組みの背景

教員・学校・地域間の 英語教育の差を解消したい

群馬県では、早くから多数の外国人労働者が県内の産業を支え、近年では海外からの観光客が大幅に増加するなど、急速にグローバル化が進んでいる。そうした状況に対応するため、小学校で ALT の配置を増やすなど、多くの地域で早い時期から英語教育の充実を図ってきた。笠原寛教育長は次のように述べる。

「県内の小学校には多くの ALT が配置され、子どもたちは抵抗なく英語特有の音やリズムに慣れ親しんでいました。一方で、英語指導に不安を感じる教員は多く、授業を ALT 任せにする傾向が見られるなど、教員・学校・地域間で指導計画や教材の整備状況、指導方法のレベルに差が見られることが課題でした」

そんな中、県内 3 地域（前橋市、嬬恋村、沼田市）が、2014 年度から文部科学省「英語教育強化地域拠点

事業」の指定を受けることとなった。そこで、前述の課題を解決するため、拠点事業を中心に据え、さらに県独自でも地域バランスを考慮して 2 地域（高崎市、太田市）を指定して研究を進めるとともに、その成果を県内全域に広げるため、県を挙げて様々な取り組みを行うこととした。

実践内容①

拠点事業と連携して 独自カリキュラムを開発

県教委がまず取り組んだのは、独自カリキュラムの開発だ。

「2014 年度に、小・中・高の教員 6 人による専任チームを群馬県総合教育センターに設置しました。そして、どの教員でも同じレベルの授業ができるよう、カリキュラム開発を進めました」（笠原教育長）

低学年は合計 10 時間分、中・高学年は年間 35 時間分のカリキュラムを作成し、2015 年 3 月、各校に冊子と音声 CD を配布。低学年はあいさ

ご案内

今年度、群馬県内 5 つの英語教育強化地域の各拠点校では、9 ～ 12 月にかけて公開授業を実施予定。詳しくは下記へお問い合わせください。
【お問い合わせ先】群馬県教育委員会義務教育課 担当：大竹 (027-226-4615) 【ホームページ】http://www.nc.gunma-boe.gsn.ed.jp/?page_id=69

つなど簡単な英語による活動を行い、3年生以降は『Hi, friends!』の内容を基本に、各学年で同じテーマを扱い、徐々にレベルを高めていくスパイラルな学びで構成している。

指導案や活動例を具体化したカリキュラムの特徴は、「音声重視」「相手意識を持たせる」「英語を使う必然性のある場面設定」の3つだ。さらに、ワークシートや絵カード、模擬授業の映像なども用意し、各校が自力で授業ができるようにした(図1)。

「初年度は、指導主事が拠点校を足しげく訪れ、管理職や現場の教員と密に連携して授業づくりを進めました。その過程で挙がった課題や要望をカリキュラムに反映させて、改訂していきました」(笠原教育長)

2016年度には短時間学習用のカリキュラムも作成。さらに今年度は、県のカリキュラムを基にした外国語の授業を経験した中学生が身につけた力を測る評価資料を作成している。

また、県教委は拠点地域における小中高一貫のCAN-DOリストの作成

も支援した。まず、県総合教育センターが素案を作成し、それを基に各拠点校が自校分を作成。校種間でどう接続すればよいかすり合わせて完成させた。沼田市では、教員が常にCAN-DOリストを持ちながら授業を行い、子ども用の振り返りシートも作成して、見通しを持って同じ目線で授業ができるようにしている。このような好事例を他地域にも共有し、全県に広げたいと考えている。

実践内容②

2017年度から県全域に10人のEATを配置

教員の英語指導力向上のため、県総合教育センターでは2015年度から3か年計画で研修を行っている。今年度の小学校英語教育推進教員研修では、県内の全公立小学校から中核となる教員約320人が参加し、3日間の研修を行う。英語教育改革の動向や授業づくりの理論を押さえた後、指導案作成や模擬授業などの演

習に取り組み、さらに拠点校での授業参観や研究会にも参加する予定だ。

また、希望者向けの研修を年2回実施するほか、2017年度までに公立小学校の全教員が拠点校の授業を参観することを目指している。

2017年度からは、指導力の高い教員を英語教育アドバイザー教員(EAT)として県内に10人配置した。

EATは、配置校でモデル授業の実施や指導計画の提案、指導方法の助言をするほか、担当地域内の小学校を訪れ、授業づくりの支援や研修会の講師などを行い、県全域の英語教育の水準を上げる役割を担う。

「EATは、指導主事と教員の中間という位置づけです。学校や地域間で差が生じないように、拠点校以外でも改革を進めたいという知事の強い思いで実現しました」(笠原教育長)

成果・展望

教員の意識が大きく変わり英語に積極的な子どもが増加

近年、子どもたちには英語に対する前向きな姿勢が育っている。拠点校での調査では、「英語の学習が好き」「英語の授業は楽しい」などへの肯定的な回答は6年生で軒並み8割を超え、特に「授業の内容がよくわかる」は約93%が肯定的だった。

また、拠点校以外でも、担任がT1として主体的に授業を行う姿が、特定の教員だけでなく、多くの教員に見られるようになった。

「各校の先生には、子どもの興味・関心を広げられるような授業づくりをお願いしています。英語教育の早期化により、早いうちから英語嫌いをつくってしまっては本末転倒ですから。移行期間中も試行錯誤を通じて様々な課題を洗い出し、全面実施に向けてしっかり準備を進めていきたいと思います」(笠原教育長)

図1 「群馬県版英語教育カリキュラム」6年生の指導案とワークシート(例)

The figure displays a sample lesson plan and worksheet for 6th-grade English education in Gunma Prefecture. The lesson plan on the left is titled 'What time is it? It's ten.' and includes a list of materials, a detailed procedure for teaching time-telling, and a matching exercise. The worksheet on the right is titled 'What time is it?' and includes a matching exercise where students connect words like 'cake', 'game', and 'name' to their respective images and labels. The worksheet also includes a section for students to write their names and the time they are working on.

英語専科やEATによる授業づくりや研修を通じて、担任の指導力向上を強力サポート



◎ 1984（昭和 59）年開校。地域に開かれた学校づくりに注力し、地域住民や保護者が教育活動支援などを行う「あさひ小学校支援隊」の取り組みが、2013 年度に文部科学大臣表彰を受けた。

校長 吉田 誠先生
児童数 582 人
学級数 21 学級（うち特別支援学級 1）
電話 0276-46-3463
URL <http://www.ota.ed.jp/asahi/>

取り組みの背景

県の拠点校として小学校英語の先行実施に取り組む

太田市には工場などに勤務する外国人労働者が多く、その子どもたちが通う太田市立旭小学校では全校児童の 1 割弱が外国籍だ。廊下や階段には英語やポルトガル語の掲示物があふれ（写真 1）、子どもたちも外国語や異文化への関心が高い。

同校は、2014 年度から県の英語教育強化地域拠点事業の指定を受け、小学校英語の先行実施に取り組んでいる。授業時数は、低学年は年間 10 時間、中・高学年は年間 35 時間としてきたが、2016 年度から高学年を教科化し、モジュールの試行を含めて年間約 70 時間を充てている。

授業づくりのポイント

動きのある活動を取り入れ、子どもの集中力を持続

授業では、県総合教育センターが開発したカリキュラムを活用。英語専科の大槻典子先生はこう語る。

「県のレスンプランを得たことで、先を見通せるようになりました。その上で、子どもの実態を踏まえ、

ALTと相談して内容をアレンジしたり、私が参加した国の中央研修の内容を取り入れたり、独自に工夫をして授業を組み立てています」

授業の流れは、県のカリキュラムと同じ、「ウォームアップ」（楽しく学習する雰囲気づくり）→「活動」→「音とつづり」（文字認識）→「振り返り」だ。各場面では、子どもの集中力が持続することを特に意識している。

「集中力が途切れると、中学年ではおしゃべりが始まり、高学年では声が出なくなります。そこで歌やチャント、体を動かす活動を随所に取り入れて、内容に変化をつけています。また、教員自身が活動を楽しむことも重要だと考えています」（大槻先生）

例えば、4 年生の「国名・国旗当てクイズ」では、各国の特徴を表したジェスチャーを交えてリズムよく



写真 1 廊下に英語の掲示物を貼り、「あさひワールドストリート」と命名。ここを通る時は、子どもも教員も、“Hello.” “Hi!” “See you.” など、英語であいさつを交わすのがルールだ。



教諭
大槻典子
おおつき・のりこ

校内研修主任。英語専科。文部科学省の英語教育推進リーダー。中学校での英語指導も経験。



英語・外国語活動指導教員（太田市 EAT）
金井律子
かない・りつこ

2016 年度の 1 年間、群馬県総合教育センターで小学校英語のカリキュラム開発チームに所属。

国名を発音したり、エアライティング（空書き）をしたりと、所々に動きを交えることで、子どもは集中力を切らさず活発に動いていた。

高学年ではモジュール学習も取り入れ、県のカリキュラムに沿って進める。45 分授業と連動している点が特徴だ。英語・外国語活動指導教員（太田市 EAT）として同校に配属された金井律子先生はこう説明する。

「高学年の授業を毎週金曜日に行い、その内容の復習や発展的な活動を翌週の月・火・水のモジュール学習で行って、理解が深まるようにしています。モジュールでも機械的な練習はせず、短時間で楽しみながら学べる活動としています」

文字指導

3 年生からは、県のカリキュラムに沿ってアルファベットに親しむ活動を徐々に取り入れている。

「3 年生ではアルファベットの形を色塗りで認識させ、4 年生ではアルファベットのなぞり書き、5・6 年生では単語のなぞり書きや写し書きと、楽しみながら気づくような学び

図2 評価に関連した「群馬県版英語教育カリキュラム」のシート例（6年生）

評価では、「群馬県版英語教育カリキュラム」の中にある「E-チャレンジ」や「CAN-DO リスト」（単元の振り返り）を活用。上図左の「E-チャレンジ」は、ALTが起床時刻や就寝時刻などを英語で言うのを聞いて、その時刻を書くというもの。上図右の「CAN-DO リスト-単元のふり返し」では、単元の到達度を自己評価させる。

*群馬県総合教育センター提供資料をそのまま掲載。

を取り入れています」（金井先生）

前述の4年生の国名・国旗当ての授業では、クイズで取り上げたイタリアやインドの「I」の文字について、エアライティングを行った後、プリントの4線上のアルファベットをなぞる活動を行った（写真2）。

評価方法

評価については、授業中の観察に加え、ALTとのやり取りを通して理解度を見る「E-チャレンジ」、単元ごとに自己評価をする「CAN-DO リスト」などを基に行う（図2）。

「県総合教育センターの資料を基に、独自の評価規準を作成していま

す。なるべく子どもに評価と感じさせない内容としています」（大槻先生）

校内外に取り組みを広げる工夫

全員参加のワークショップ型研修で指導力を伸ばす

授業を担当するのは、3年生以上では担任・ALT・専科の3人だ。T1は原則として担任で、授業案や教材などの準備を専科の大槻先生が中心となって進め、授業前に担任、ALTと打ち合わせを行う。モジュールは担任が1人で進めるため、大槻先生と事前に予行演習を行う。

英語が得意でない教員でも安心して指導できるよう、2016年度からは月2回の頻度で校内研修を行い、毎回1～2時間かけて英語力や指導力の向上を図っている。研修には全教員が参加し、歌やチャンツの進め方、クラスルーム・イングリッシュの使い方などを演習形式で学ぶ。

「テーマに沿って、学年ごとのグループで話し合い、全体に発表する

ワークショップを行うなど、先生方がなるべく主体的に取り組めるようにしています」（大槻先生）

また、普段から授業をビデオで撮影して、校内研修の際に好事例を共有することも行っている。

「大切なのは、英語力ではなく、英語を一生懸命話そうとする姿勢です。先生方には間違いを気にせず、簡単な英語をワンフレーズでもよいので使って、子どもと一緒に学びましょうと伝えています」（大槻先生）

また、旭小学校の実践を他校に広める役割を、金井先生が担っている。金井先生は、太田市EATとして、県から派遣されたEATと連携。担当する市内12の小学校を定期的に訪問して、授業づくりのアドバイスをを行い、時には実際に授業も行っており、各校の教員を支援している。

成果と展望

英語を聞く耳が育ち、教員の指導力も高まる

これまでの実践を通して、大槻先生は、「英語は楽しい」という気持ちを持って中学校に進学する子どもが増えたという手応えを感じている。

「中学校からはよく、『耳が育っている』と言われます。先生が話す英語はほぼ理解しており、自分の考えを表現することにも積極的なようです」

教員の意識も大きく変化した。初めての教員には大槻先生がフォローに入るが、従来からいる教員は抵抗なく英語を話し、ALTをうまく活用しながら積極的に授業をリードできるようになってきた。

「今後は、小中連携やICT環境の整備が進み、恵まれた環境の中で工夫した指導につながればと考えています。同じ中学校区で情報共有を進めて、地域全体の英語力向上を目指していきたいと思っています」（大槻先生）



写真2 全身を使ってアルファベットを書くエアライティング。大槻先生が国の中央研修で学んだ手法を授業に取り入れた。

独自カリキュラムと多様な研修で 教員の意識改革など準備を進める

東京都町田市

東京都町田市は、2016 年度から東京都の指定を受け、小学校英語の教科化を見据えた研究を推進している。地元の玉川大学と連携し、現場教員とともに練り上げた高学年向けの英語カリキュラムを基に、中学年向けのカリキュラムも作成。英語教育推進リーダーの検証授業を経て、2017 年度から現場で活用している。研修も各校の英語教育担当者向けに年十数回用意するなど、教員の意識改革、指導力向上に努めている。

町田市教育委員会の施策

カリキュラム作成、研修の充実、授業時数確保の提案とあらゆる面で現場の推進体制を整える

市が目指す方向性

教員の意識改革により、 担任主体の授業に転換したい

町田市では、10年ほど前から地元の玉川大学と連携し、高学年の「外国語活動」のカリキュラムを独自に作成し、全市立小学校で運用してきた。2013年度には、その検証授業を10回程度実施し、その結果を踏まえて2014年度にカリキュラムを改訂した。学校教育部指導課の酒井章指導主事は、次のように振り返る。

「授業者の声を反映して、子どもが意欲的に学べるよう、より必然性の高い場面設定にして、『Hi, friends!』と同じ順序で表現を学ぶ形にしました。現場の教員、玉川大学、指導主事が議論したことで、よく練られたカリキュラムが完成し、現場からの不満の音が大幅に減りました」

当時の現場はALTへの依存傾向が強く、市教委は、ALTの協力を得つつも担任が主体的に授業を行う必要性を痛感していた。そこで、教員の

意識改革と、中学年向けのカリキュラム開発をねらいとして、東京都「英語教育推進地域」に手を挙げた。そして、2016年度から指定を受け、新学習指導要領に対応したカリキュラム開発と実践を進めている。

実践内容

2018年度からの先行実施 に向け着実に準備を進める

推進体制として英語教育推進会議を設置し、小学校では国・都の英語教育推進リーダー（2人）と合わせて、7人を英語教育推進リーダーに任命（2017年度には9人に増員）。また、各小・中学校から英語教育担当者を1人任命してもらい、英語教育担当者連絡会を設置した。

カリキュラム開発

まず、玉川大学に委託して、高学年向けを基に中学年向けのカリキュラムを2016年に開発。2学期に英語教育推進リーダーによる検証授業を6回行い、修正した上で全校に配布し、



学校教育部指導課
指導主事

酒井 章

さかい・あきら

東京都内の中学校教諭（英語科）を経て、2013年度から現職。

東京都町田市プロフィール

◎ 1958（昭和33）年、東京都で9番目の市として誕生。交通の便のよさを背景に商業が集積する一方、緑豊かな美しい自然、多くの大学等がある学園都市の面も併せ持つ。

人口 約42.9万人 面積 71.8km²
公立学校数 小学校42校、中学校20校、
児童生徒数 約3万3000人
電話 042-722-3111（代）
URL <http://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/shiyakusyo/gyomu/kyouiku/>

2017年度から活用している（図1）。

「中学年向けのカリキュラムは、高学年の内容を下ろしたものがほとんどでしたが、検証授業では予想以上に3・4年生が活発に英語を話していました。中学年でもこんなにできるのだと、参観した中学校教員が驚くほどでした」（酒井指導主事）

カリキュラムの特徴は、15分間の

図1 中学年向けカリキュラム 4年生の指導案(抜粋)

第4学年【Unit 6-1】一日の生活を紹介します				
Hi, friends! 2 Lesson 6 What time do you get up?				
本時のねらい →英語での時間の言い方に慣れ親しむ。 本時の目標表現 A: What time is it? B: It's eleven fifteen. 本時の目標文句 時刻を表す数 短針: 1~12 長針: 1~60				
展開	児童の活動	HRT	ALT	留意点・教材
挨拶 1分	全員が元気に声を出して HRT, ALTと挨拶をする。	はじまりの挨拶 HRT: Hello, class. Ss: Hello, Ms. / Mr. (担任の先生の番号) ALT: Hello, class. Ss: Hello, Ms. / Mr. (ALTの先生の番号) ALT: Let's start our English class.		・全員が元気に声を出して挨拶をする。
動機付け + 目標 3分	今日の授業では、どのようなことをやるのか、確認する。	本時の活動への動機付け →目標 例:「今何時ですか」と日本の時刻を尋ね、オーストラリア、インドネシアの時刻も尋ねる。日本より東に位置しているので1時間差がある。		・児童に本時の活動内容への興味をもたせる。
導入・練習 11分	1から60の数字を覚える。 1時から12時を覚える。	本時の活動への動機付け →目標 例:「今何時ですか」と日本の時刻を尋ね、オーストラリア、インドネシアの時刻も尋ねる。日本より東に位置しているので1時間差がある。	目標文句の提示 ●11~60の数字を覚える。 例: 1時の時計を見せて、It's one. を導入する。 1時から12時まで行なう。 目標文句の練習 ●手拍子(2拍子)でリズムにのせて時間を言う 例: Come in two It's three... 目標表現の提示 ●HRTとALTのモデルを見せる。 時刻の言い方の練習をする。	●短針 Activator Sheet 1~60の数字 ●時計 ・チャップは手拍子(2拍子)でリズムをとる練習をする。 ●時計 ●デジタル時計のクワッドカード(10枚)
練習 1分	ALTとHRTの目標表現のモデルを演習を繰り返す。	ALTとHRTの目標表現のモデルを見せる。 時刻の言い方の練習をする。	ALTとHRTの目標表現のモデルを見せる。 時刻の言い方の練習をする。	●時計 ●デジタル時計のクワッドカード(10枚)
練習 1分	ALT: What time is it? Ss: It's five. What time is it? ALT: It's seven. 何時何分の言い方のモデルを演習を繰り返す。	ALTとモデルを見せる。 クワッドカードを見せる。	ALTとモデルを見せる。 クワッドカードを見せる。	●時計 ●デジタル時計のクワッドカード(10枚)
練習 1分	ALT: What time is it? HRT/Ss: It's seven twenty-five. ALT: What time is it? HRT/Ss: It's eight thirty.	ALTとモデルを見せる。 クワッドカードを見せる。	ALTとモデルを見せる。 クワッドカードを見せる。	●時計 ●デジタル時計のクワッドカード(10枚)
挨拶 1分	HRT: Thank you, Ms. / Mr. (ALTの番号) Ss: Thank you, Ms. / Mr. (ALTの番号) ALT: Thank you. See you next time. Ss: See you!	HRT: Thank you, Ms. / Mr. (ALTの番号) Ss: Thank you, Ms. / Mr. (ALTの番号) ALT: Thank you. See you next time. Ss: See you!		・終わりのあいさつをしつかりとする。

モジュールに対応していることだ。

「先行実施では高学年でモジュールを取り入れる学校が多いと予想されるため、その教材としても選べるようにしました」(酒井指導主事)

一方、高学年では、『Hi, friends!』や東京都の英語補助教材『Welcome to Tokyo』などのほかに、他教科で学んだ知識を使って英語学習を行うCLIL*1も導入。2016年度に玉川大学で講習を受けた英語教育推進リーダーが指導案を作成し、社会科の単元と英語のクイズ大会をリンクさせるなどの内容で公開授業を行った。

「英語は嫌いでも社会なら興味を示す子もいます。主に既習事項について取り組ませたのですが、実生活に基づく必然性が高い内容だったため、子どもたちはとても意欲的で、内容的にも面白い授業でした。全教科を担当する担任は引き出しが多く、そこに担任が英語の授業を行う意義があると実感しました」(酒井指導主事)

各種研修の用意

同市では、2018年度から全市立小学校で、中学年は年間35時間、高学年は年間70時間の小学校英語の全面実施を決定。2017年度はその準備段階として、中学年を年間15時間に増やし(高学年は年間35時間)、さらに2016年度に整えた体制を現場に下ろすため、様々な研修を用意した。

①小学校英語公開授業参観研修 各英語教育推進リーダーが自校で公開授業を行い、それを各校の英語教育担当者が最低2回は参観する。

②玉川大学による校内研修 玉川大学から派遣された講師が全市立小学校を回り、英語教育推進リーダーの授業動画を見ながら教員と討論を行う研修を、各校で年2回ずつ実施。

③還元研修 国の中央研修の受講者による還元研修に、各校の英語教育担当者が参加。参加者はその後、各校で伝達研修を行う。

④夏季休業中の研修 希望者対象に、

指導力育成と英語力向上研修を実施。

「各研修ではなるべく、実際の授業を見てもらうようにしています。また、先行実施は様々なことにチャレンジできる時期だと伝え、先生方が完璧を目指して気負いすぎないように配慮しています」(酒井指導主事)

授業時数の確保

授業時数増への対応を各校が検討できるよう、市教委では『小学校英語』先行実施の手引き』という冊子を作成し、複数の具体案を提示した。

「地域活動が活発な地域のため、土曜日に授業を行うのは難しく、市内の小学校では、国語の1コマ分をモジュールにしてドリル学習などに充て、それで生まれた時間に英語を充てる学校もあります」(酒井指導主事)

成果・展望

検定試験も活用し、現場に具体的な目標を示したい

事業指定から1年が経ち、教員の英語教育への意識は高まりつつある。

「世の中が後押ししている部分もあると思いますが、各校の校長からは先生方の意識が前向きに変化していると感じています」(酒井指導主事)

今後の課題には、「評価」「読み書きの指導」「支援員」を挙げる。読み書きの指導法については、玉川大学に委託し、2016年度から指定の小学校で行われている「放課後英語教室」で試行した結果を踏まえて、本年度中に指導案を作成する予定だ。また、児童の英語力を検証するため、「GTEC Junior」*2の活用も検討中だ。

「目標がはっきり分かれば、先生方は納得感を持って指導できます。その点、この検定の出題は、目指すべき英語力の方向性が具体的に分かり、今後に生かれます。検定もうまく活用しつつ、先生方をさらに支援していきたいと思っています」(酒井指導主事)

*1 Content and Language Integrated Learningの略。

*2 ベネッセが提供する小学校の外国語活動で学んできた英語力の4技能をタブレットを用いて測定するテスト。

英語教育推進リーダーを中心に研修を重ね、 徐々に教員の意欲と指導力を高めていく



◎ 1970 (昭和 45) 年開校。豊かな自然に囲まれ、明るく、人懐っこい子どもが多い。アットホームな雰囲気のある学校。

校長 土田 昇先生
児童数 250 人
学級数 13 学級 (うち特別支援学級 4)
電話 042-722-8193
URL <http://www.machida-tky.ed.jp/school/e-honmachida-e/>

主任教諭

村山 恵

むらやま・めぐみ

研究主任。文部科学省及び東京都の英語教育推進リーダー。主に 5・6 年生の英語を担当。

校内研修の工夫

アンケートを実施して、教員の不安や悩みを明らかにする

「Let's start! 1st hint, it's a fruit.」

町田市立本町田東小学校では、月・水・金の朝 15 分間、高学年で英語のモジュール学習を行っている。この日の 5 年 1 組の授業は、英語専科の村山恵先生が T1、担任が T2 となり、スリーヒントクイズを行った。電子黒板に形や色などのヒントを 1 つずつ映し、村山先生が「What's this?」と問いかけると、子どもたちは一斉に手を挙げて大きな声で「Banana!」「Baseball!」と答える (写真 1)。

続いてプリントを配布し、ペアで考えてスリーヒントクイズを作る。今回は 8 回のモジュールで完結する学習の 1 コマで、次回は日本語で考えた内容を電子辞書*1 で調べて英語に



写真1 モジュール活動の様子。高学年の計 3 クラスが同時に活動するため、学級担任、ALT、村山先生がいずれかのクラスの T1 となる。

直し、クイズを完成させる予定だ。

「『日本語と英語のどちらで書いてもいいよ』と言うと、頑張っ英語で書こうとする子もいました。子どもたちは皆、積極的に英語を使おうとしています」(村山先生)

村山先生は、2016 年度から国と都の英語教育推進リーダーを務めている。中・高の英語教員免許を持っていることから抜擢され、現在は英語専科の加配だ。校内の英語教育を主導するとともに、指導主事と市内各校を訪問し、授業参観をして助言したり (月 1 回程度)、小学校英語公開授業参観研修や中央研修の還元研修の講師を務めたりして、市内各校への英語教育の浸透に努めている。

以前の同校では、授業における ALT への依存傾向がとて強く、都の事業指定を受けて担任中心の授業への転換を図ることに、かなりの抵抗があった。そこで、村山先生はまず、先生たちに向けてアンケートを実施。すると、「授業の進め方や教材の作り方が分からない」「英語を話せないから授業はできない」といった不安や悩みが明らかになった。

「先生方は『やらない』のではなく『やり方が分からない』のだと分かりました。校内研修を行うにあたって

は、先生方の不安を取り除き、疑問に答える内容にしました」(村山先生)

村山先生は 2016 年の夏以降、先生方を支援するために、校内研修を実施し、ゲームや歌などの活動の進め方とねらいを説明。さらに、村山先生が T1 となって行う授業を担当に見てもらったり、授業案と教材を準備して先生方がすぐ授業を始められるようにしたりするなど、様々な支援を行っている (写真 2)。

「移行期の今はハードルを低くするため教材作成などに深くかかわっていますが、徐々に担任の先生へ移行させていく予定です」(村山先生)

授業づくりのポイント

子どもが必然性を感じて伝え合える活動を組み込む

同校の英語の授業時数は、市内の



写真2 イングリッシュ・ルームに掲示している村山先生作成のクラスルーム・イングリッシュは、子どもたちに分かりやすいだけでなく、先生方に授業で活用してほしいという思いもある。

* 1 市と連携する企業の協力により、電子辞書が市内 3 校に各 20 台ほど貸与されている。

他校よりも多い。ALTメインの低学年は年間6時間と他校と同じだが、中学年は週1コマの年間35時間で、担任メインとALTメインに分け、高学年は週1コマと週3回のモジュールで年間70時間とし、担任・ALT・村山先生が持ち回りでT1を担当する。

カリキュラムは、中学年では市作成のものを活用し、高学年では『Hi, friends!』、東京都作成の『Welcome to Tokyo』、市作成のものを組み合わせて年度当初に独自の年間指導計画を立てている(図2)。45分授業では『Welcome to Tokyo』、モジュールでは『Hi, friends!』を主に活用。双方で内容が関連している場合は、なるべく同時期に扱うように組み替えた。

「『Welcome to Tokyo』は、特産品や行事など日本文化を海外に紹介する項目が多く、調べ学習の時間が必要のため、45分間かけてじっくり取り組めるようにしました」(村山先生)

『Welcome to Tokyo』や他教科と連動させ、CLILも積極的に行う。

「中学年ではゲームなどで言葉を繰り返す活動でも活発に取り組みますが、高学年では飽きてしまうので、学習の動機づけとして必然性が重要になります。その点、自分で調べたり考えたりしたことは相手の知らないことなので、友だち同士でも意欲的に伝え合おうとします」(村山先生)

例えば、6年生では、日本の遊びや食べ物から1つを選び、その特徴を調べて日本語で書き、電子辞書を

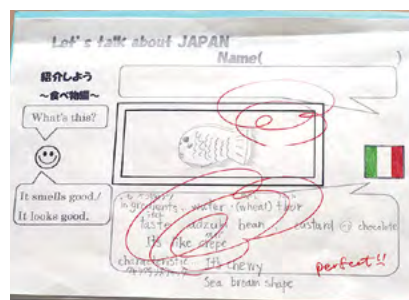


写真3 日本の食べ物を紹介する単元でのワークシート。この児童は、たいやきの材料や味を表す英単語を電子辞書で調べて書いている。

使って英語に直し、発表し合うペア活動を行った(写真3)。

「紹介するものがそれぞれで異なるため、子どもは初めて聞く単語にたくさん触れることにはなりますが、知らない単語でも相手が一生懸命話せば聞き取ろうとしますし、聞き取れた音から言葉の意味を推測しようとしています。また、同じ食べ物でも

英語では2通りの言い方があったりと、新たな発見にもつながります。そうした一つひとつが意味のある学習となりました」(村山先生)

成果と展望

完璧な英語よりも、伝えたいという気持ちを育みたい

村山先生は、学級担任と専科、両方の立場で英語指導を経験し、担任が指導する強みを実感したと語る。

「専科では子どもに会う頻度が下がるので、互いになじむまでに時間がかかります。その点、担任は子どもとの関係を築けているため、すぐ授業に入れます。実際、私が以前担任だったクラスの授業はやりやすかったです。また、他教科と関連づけた内容にしたり、すき間時間に英語の歌を入れたり、フレキシブルに指導ができるのも、担任の利点です」

担任が英語を使うことが、子どもにもよい影響を与えと言う。

「先生が頑張る姿を見れば、子どもは応援し、協力もしてくれます。私も以前、完璧な英語を話さなければという思いにとらわれていましたが、オンライン英会話を受講した時に、フィリピン人の先生が一生懸命、

図2 6年生の年間指導計画(抜粋)

Unit 時数	モジュール(15分単位)計画 ※①を15分間で行う 【Hi, friends! 2】	町田市の学校 英語カリキュラム ※45分間授業 【Hi, friends! 2】	町田市の学校 英語カリキュラム ※45分間授業 【Welcome to Tokyo】
1	アルファベットクイズを作ろう ① 挨拶・自己紹介の仕方練習 ② アルファベットの数・言葉作りゲーム ③ 絵本読み聞かせ・名刺カード交換ゲーム ④ どの動物を表す文字かゲーム ⑤ ①～④クイズを作ろう ○そのほかに1.の復習時間に充てる。 DVD視聴(Welcome to Tokyo) など 計2時間	Lesson1 「アルファベットクイズを作ろう」 ・Hi, friends! を使って見つけたアルファベットを書き写し、クイズ形式で紹介する。 ・クイズを作ったり答えたりする中でアルファベットに親しむ。 ○そのほかに、モジュールを組み合わせたリ、Unit1-2, Unit1-3をやってみたりするなどして1時間を組み立てる。 計3時間	【Welcome to Tokyo】 【Tokyo Map】(教科書裏表紙) いろいろな国や地名を覚えてみよう! ＜社会科の学習の復習＞ 【Welcome Cards】 東京の観光スポットや行事を調べよう! ○調べて発表する。 計5時間
2	誕生日を調べよう	Lesson2	

*本町田東小学校提供資料をそのまま掲載。

私の質問に答えようとしてくれる姿を見て、ネイティブではないのだから完璧を目指さなくてもよいのだと気づきました。何よりも『伝えたい』『相手を理解したい』という思いを育むことが大切です。先生方にはワンフレーズでもいいからクラスルーム・イングリッシュを使ってみましょうと呼びかけています」(村山先生)

「これは英語で何と言うの?」という質問が増えるなど、子どもたちには英語学習への積極的な姿勢が見え始めている。パフォーマンステスト^{*2}ではどの子も意欲的で、「楽しかった」という声も挙がった。スピーチも全体的に上手で、やれば身につくものだと成果を実感している。

教員の意識も徐々に変わりつつある。最近では、日本の旧暦の名称と英語の月の名称を関連させて学ばせるなど、工夫した取り組みをするベテラン教員も増えてきている。

「小学校英語に対して、前向きに取り組もうという雰囲気が学校全体に出てきました。これからも『英語を』教えるのだと肩肘張らずに、『英語で』子どものコミュニケーション力を高めるきっかけをつくるのだと考えて、先生方が指導できるよう支援していきたいと思います」(村山先生)

*2 町田市と同様に東京都「英語教育推進地域」の事業指定を受けた西東京市が作成したテストを、検証として実施した。

モジュールの時間を利用するほか、45分授業確保に工夫を凝らす例も

新学習指導要領への移行措置では、「総合的な学習の時間」から15時間を外国語（英語）に活用してもよいことになったが、2020年度を見据えると、早くから35時間の増加分をどう確保すべきか検討を進めていくことが必要だろう。

ここでは、高学年で既に年間70時間の英語の授業時数確保を行い、試行錯誤を重ねてきた5つの学校事例を紹介する。それぞれのメリット・デメリットを踏まえて、自校にとって最適な方法を探りたい。

*ここでの「時間」は「単位時間」（45分）を指す。1コマも同様。

■…英語の時間 ■…工夫点

45分×週2コマ型 島根県◎雲南市立吉田小学校の場合

取り組みはP.4～7参照

委員会・クラブ・学活の時間を柔軟に運用し、毎週29時間を確保

授業時数確保のポイント

- 英語教育強化拠点事業の2年目（2015年度）から週2コマ、45分授業を導入。
- 上記に伴い、委員会活動を月1回、クラブ活動を年8回とし、夏休みも短縮。
- クラブ・委員会・学活を基本的に木曜6時限目に集約。クラブか委員会がある週は、月曜6時限目に学活を行い、毎週29時間の授業時数を確保。
- 職員会議は毎週月曜日に行う。5時限目までの日は15:30～17:00、6時限目

までの日は16:00～17:00に行っている。

- 授業とは別に、朝のドリル学習も実施。

メリット・デメリット

- メリット 45分あると授業が深まる。モジュールは時間が短いため、意味のある授業をつくるのが難しい。また、モジュールは回数が多い分、かける労力が多く、45分授業の方が全体として負担が少ない。理解度も45分の方が高まる。
- デメリット 高学年の担任の持ち時数が多くなるため、その負担が大きい。

5・6年生 1学期 週時間割表

	月	火	水	木	金
1	社	総	国	総	国
2	算	体	算	体	体
3	図	国	書	英	算
4	国	音	道	算	音
5	英	理	家	社	社
6	学	算	理	委ク	学

週1コマ+モジュール・45分併用型① 東京都◎武蔵村山市立第三小学校の場合

午前5時間制や時程の繰り上げ実施で年間最大60時間を確保

授業時数確保のポイント

- 週1コマ45分授業（年間35時間）に加え、さらに週1コマ分確保のため45分授業（年間25時間）と週1回15分のモジュール×30回（年間10時間）を実施。
- 研究授業日や土曜の学校公開日を午前5時間の特別時程とした。また、午後が研究会や出張等でカットされがちな水曜・金曜の時程を繰り上げて6時限終了時刻を14:25に早め、45分授業の時間を確保。
- 時程を繰り上げて生み出した水曜6時限目に、委員会活動（年間11時間）、クラブ活動（年間16時間）を実施。

メリット・デメリット

- メリット 最大60時間の余剰時間が確保でき、授業時数に余裕が生まれた。また、水曜・金曜の時程を繰り上げたことで、

金曜の放課後に、職員会議・校内研究や分掌打ち合わせ、教材研究の時間が取れるようになった。

- デメリット 曜日によって時程が違うので、教職員・児童が慣れるまで時間が必要である。また、理解を得るために教職員はもとより、保護者への事前周知が必要である。

一言アドバイス

早めの着手が望ましい。本校では前年度の夏季休業中にモデルパターンを複数作成し、検討した。

時程表

曜日 時間	火 (月・木も同様の時程)	水・金	研究授業、 土(学校公開)
朝の活動	英語モジュール 8:20～8:35	学級指導 8:15～8:20	学級指導 8:15～8:20
	学級指導 8:35～8:40		
1	8:40～9:25	8:20～9:05	8:20～9:05
2	9:30～10:15	9:10～9:55	9:10～9:55
中休み	(20)	(20)	(10)
3	10:35～11:20	10:15～11:00	10:05～10:50
4	11:25～12:10	11:05～11:50	10:55～11:40
給食	12:10～12:50	11:50～12:30	
清掃、 昼休み	12:50～13:25	学級指導、昼休み、 簡単清掃等 12:30～12:50	休み時間後、 そのまま 5時限目へ
5	13:25～14:10	12:50～13:35	11:45～12:30
6	14:15～15:00	(水のみクラブ活動、 委員会活動) 13:40～14:25	その後、給食、 学級指導、 研究授業等

学校 プロフィール

◎2015年度より、文部科学省の英語教育強化地域拠点校として、小学校英語の研究を推進。また、東京都オリンピック・パラリンピック教育アワード校でもある。
校長 前川 潤先生 児童数 494人 学級数 15学級 電話 042-561-1753
URL <http://www.city.musashimurayama.lg.jp/school/mmced3s/>

週1コマ+モジュール・45分併用型② 徳島県◎阿波市立伊沢小学校の場合

モジュール教科を増やし、柔軟な時間割編成が可能に

授業時数確保のポイント

- ・同校では、週1コマの45分授業以外に、朝の帯時間に行う15分×3回の短時間学習と45分授業を併用している。
- ・ポイントは、国・算もモジュール化し、週3回の短時間学習を国・算・外の抱き合わせとしたこと（学習の内容に合わせて、どの教科をモジュールにするか決定）。さらに週1コマ、国・算・外の抱き合わせの時間を設定した。
- ・以前はモジュール独自の内容だったが、学習の必然性が弱かったため、モジュール学習を単元の中にきちんと位置づけて、単元計画に沿った内容とした。

メリット・デメリット

- ・メリット モジュールは15分だけなので、子どもが集中できる。また、短時間

での積み重ねができ、学習内容の定着につながる。

- ・デメリット 学びを深めるには15分では足りない。気づきを促す→共有→考えを深めるという一連の流れを行うには、45分の方が望ましい。

一言アドバイス

モジュールと45分授業で授業に参加する教員が異なる場合は、情報共有や連携をより綿密に行う必要がある。

学校プロフィール

◎1947（昭和22）年開校。徳島県の中央部にある、豊かな自然環境に恵まれた小学校。地域と協働して食育に力を入れている。
校長 細井 誠先生 児童数 188人 学級数 12学級（うち特別支援学級5）
電話 0883-35-2034
URL <http://e-school.e-tokushima.or.jp/awa/es/isawa/html/>

■時程表（例）

時	月	火	水	木	金
8:10	全校朝会	短時間学習 (外・国・算)	短時間学習 (外・国・算)	集会	短時間学習 (外・国・算)
8:25					
8:40	1校時				
9:25					
9:30	2校時				
10:15					
10:40	3校時				
11:25					
11:35	4校時			外国語	
12:20					
13:00					
13:30					
13:50	5校時	外・国・算			
14:35					
15:05	6校時				

週1コマ+モジュール型① 東京都◎町田市立本町田東小学校の場合

取り組みはP.18～19参照

朝1時限目の帯時間を活用し、週3回のモジュール学習を行う

授業時数確保のポイント

- ・同校では、週1コマの45分授業以外に、月・水・金に朝15分の英語モジュール学習を実施。1時限目を60分授業にして、そのうちの最初の15分を英語モジュールに充て、そのままの流れで次の授業に入る。火・木も1時限目は60～75分授業を実施。内容や時間配分はクラス裁量。
- ・英語モジュールとは別に、月・水・金

に朝読書を行っている。

メリット・デメリット

- ・メリット 15分授業は慣らし運転に向いている。英語を教えるのが初めての先生にも「15分ならできる」と言われた。また、子どもたちがコンスタントに英語に触れられるので、英語に慣れやすい。
- ・デメリット 今のところはうまく行っている、特に感じていない。

■時程表／月曜日の場合

時／曜	月曜日
朝の活動	朝読書 8:15～8:25 朝の会 8:25～8:40 英語モジュール 8:40～8:55
1	8:55～9:40
2	9:45～10:30
中休み	10:30～10:50
3	10:50～11:35
4	11:40～12:25
給食	12:25～13:10
清掃	13:10～13:25
昼休み	13:25～13:45
5	13:45～14:30
帰りの会	14:30～14:45
6	クラブ 14:45～15:45 委員会 14:45～15:30

週1コマ+モジュール型② 群馬県◎太田市立旭小学校の場合

取り組みはP.14～15参照

昼に帯時間を設定し、週3回のモジュール学習を行う

授業時数確保のポイント

- ・同校では、2017年度から昼の帯時間にモジュールの時間を確保。13:55から「あさひタイム」という15分の帯時間を設け、そのうちの月・火・水を英語に充てている。
- ・英語がない曜日や小1～4の「あさひタイム」は、連絡帳の記入に充てる。
- ・小5・6はALTの来校日に合わせ、金曜日に45分の英語の授業を組み込む。
- ・朝に、ドリル学習や読書の時間を確保。

メリット・デメリット

- ・メリット 児童が週4日英語に触れることとなり、機会が増えたことで学習内容の定着が図れている。児童からはモジュールの活動が楽しいとの声も。
- ・デメリット ALTや専科教員がすべてのモジュールに入ることは難しく、担任1人で行う場合、担任の負担が大きい。事前に学習内容を確認し、授業の質を確保することが必要。

■時程表／普通校時の場合

時程	普通校時
朝行事・学活等	8:25～8:50
第1校時	8:50～9:35
第2校時	9:40～10:25
休み時間	10:25～10:50
第3校時	10:50～11:35
第4校時	11:40～12:25
給食・歯磨き	12:25～13:10
昼休み	13:10～13:35
掃除	13:35～13:50
移動	13:50～13:55
あさひタイム	13:55～14:10
第5校時	14:15～15:00
第6校時	15:05～15:50



地域人材や民間企業と手を携え、 子どもが主体的に学ぶ環境を築く

学力向上が長らく課題だった岡山県和気町は、「教育の町」を目指し、町を挙げての施策に本腰を入れた。

ベネッセコーポレーションと提携し、地域ボランティアを活用した「放課後学習支援」を展開。

文部科学省「教育課程特例校」（英語特区）の指定を受けて英語教育を見直すなど、重要な施策を打ち出している。

学力向上へのステップ

背景と課題

◎文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、全国や県の平均正答率を下回るなど、学力不足が明らかになっていた。特に家庭学習習慣が定着しないことが大きな要因だと考えられていた。

実践のポイント

◎小・中学校で週1回、地域人材を活用した「放課後学習支援」を行い、基礎学力と学習習慣の定着を図る。2015年度からはベネッセの「総合学力調査」で課題を分析し、算数・数学に絞って対策を進めている。
◎文部科学省の「教育課程特例校」（英語特区）の指定を受け、全町立小・中学校にALTを常駐。小学校では全学年で英語教育を実施し、中学校では通常授業のほかに「オーラルコミュニケーション」を新設。

成果

◎算数・数学の基礎力が定着。岡山県実施の学力調査で中学1年生の数学が県内1の伸び率に。
◎家庭学習の定着率が徐々に向上。
◎英語でのコミュニケーションを楽しみ、積極的に学ぶ生徒が増加。

教育長の戦略

学力向上と英語教育の充実で 子どもの選択肢を広げたい

和気町教育委員会 教育長 朝倉健作

教育の力で 地方創生を実現する

和気町は、小学校は3校、中学校は2校を有する小さな自治体です。人口減少が続く中、教育の力で町を活性化させたいという住民の思いを受けて、「教育の町」を目指して町全体で取り組んでいます（図1）。住民の理解の下、町政においては教育に優先的に予算を充てている状況です。

町内にある岡山県立和気閑谷高校は、江戸時代前期に岡山藩が設立し、日本最古の庶民教育の場と言われる旧閑谷学校の流れをくみます。そのことも、本町の人々が教育の町として誇りを抱く理由でしょう。

本町は、岡山駅など県の中心部への交通アクセスがよいので、中学校卒業後に外部へ出る子どもが少なくありません。そこで、小・中学校を通して地域に根差した教育活動を展



あさくら・けんさく 国士舘大学体育学部卒業。岡山県内の中学校教員・校長を経て、2007年度から現職。

開し、町のよさを十分に伝え、「和気町に生まれ育ち、学ぶことができてよかった」という思いを育むことを目標にしています。そうすることで、

将来的に町に戻り、「もっと地域をよくしたい」と地方創生に取り組む人材を育てたいと考えています。

家庭学習習慣の定着が 学力向上への第一歩

私が教員として初めて本町に赴任した1975年と比べて、子どもの姿は大きく変化しています。当初は、小・中学校で「荒れ」が見られましたが、厳しいルールで縛りつけることはせず、子ども自身が目標を決めて頑張るよう促したり、中学校では生徒会活動に力を入れたりするなど、子どもの主体性を引き出す指導を伝統的に大切にしてきました。そうした教育活動が功を奏し、子どもは次第に落ち着いて学習に取り組むようになりました。しかし、学力不振からはなかなか抜け出せない状況が続きました。その大きな要因は、家庭学習時間の不足にありました。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果でも、小・中学校ともに、家庭学習を全くしない、もしくは30分以下という子どもが多く見られたのです。

そこで、「家で勉強をしないのなら、学校でしてもらおう」と考え、2013年度に「放課後学習支援」を始めました。この取り組みは地域のボランティア人材を活用するもので、2015年度からはベネッセとも提携し、子どもの実態や課題を分析した上で、より本格的な取り組みへと進化させています。現在、「放課後学習支援」は、子どもたちの学力向上を支える、町の重要な教育施策の1つとなっています。

英語特区として 先進的な取り組みを開始

もう1つ、町の教育活動の柱と位置づけているのが、英語教育です。2017年度、独自カリキュラムを導入できる文部科学省の「教育課程特例

図1 「教育の町」に向けた和気町の主な施策

放課後学習支援	各小・中学校で地域ボランティアを募り、週1回、放課後学習の支援を実施し、基礎学力や家庭学習習慣の定着を図る。ベネッセの「総合学力調査」の結果分析に応じた算数・数学のプリントも用意。
英語教育の拡充	文部科学省より、独自カリキュラムを導入できる「教育課程特例校」（英語特区）の指定を受け、英語教育の充実を図る。全ての小・中学校にALTを配置するほか、小学校では全年で外国語活動を実施し、中学校では新たに「オールラコミュニケーション」の授業を設置した。
公営塾の運営（地方創生課）	町内の小・中学生（小学5年生から中学3年生まで）を対象に、毎週水・土曜日に無料で英語の学習ができる公営塾を開設。検定対策の指導や、外国人との英会話が体験できる授業などを行っている。

*和気町教育委員会提供資料と取材を基に編集部で作成。

校」（英語特区）の指定を受け、小・中学校で英語教育の充実を図る様々な取り組みをスタートさせました。小学校で「英語が好き、楽しい」という子どもを増やし、中学・高校でさらに英語によるコミュニケーション能力を育てることで、子どもたちに国際的な視点を持って活躍する力をつけさせたいと考えています。

学力向上に向けた取り組みとしては、ほかにも、きめ細かな指導のために、小学校低学年は1クラス30人、中学年以降は35人という少人数学級を導入しました。

さらに、2016年度からは町の地方創生課が「公営塾」を運営。町内在住の小学5・6年生と中学生が無料で利用できるようにして、英語を中心とした講座を開講しています。

子どもの力を伸ばすためには、各校の管理職が意識を高く持って取り

組むことが重要です。管理職が変われば学校は変わり、教員も子どもも変わっていきます。我が町でも、町教委が学力向上に向けた様々な施策を打ち出したことで、各校は町全体として教育に取り組んでいくという「本気」を感じ取り、管理職を中心として意識が一層前向きになっています。今後、ますますリーダーシップを発揮してくれることでしょう。

これらの取り組みにより、2016年度に岡山県が実施した学力調査では、中学1年生の数学で県内1の伸び率となりました。子どもの学力を十分に高めるとともに、地域とグローバルの双方を見つめる視点を育むことで、子どもの将来の選択肢はどんどん広がっていくはずです。これからも一人ひとりが豊かな人生を歩めるように、教育ができることを考え続けていきます。

岡山県和気町プロフィール・問い合わせ先

◎岡山県の南東部に位置する。2006年に旧佐伯町と合併して現在の町域となった。日本一の藤の花の種類を誇る「藤公園」、8月に観音山に「和」の火文字が点火される「和文字焼きまつり」、タンチョウを保護する「岡山県自然保護センター」などが有名。

◎人口 約1.5万人 ◎面積 144.21km²

◎町立学校数 小学校3校、中学校2校 ◎児童生徒数 928人

◎住所 岡山県和気郡和気町矢田305（佐伯庁舎） ◎電話 0869-88-1115

◎URL <http://www.town.wake.okayama.jp/gyosei/education/>

アセスメントで課題を分析し、 対策プリントを用意

和気町教育委員会

まずは算数・数学に絞り 学力不振からの脱却を図る

和気町は「教育の町」を目指し、小・中学校ともに学力向上策を推進する。教員の授業改善の取り組みとしては、岡山県教育委員会が策定した「岡山型学習指導のスタンダード」を活用。各教科において、「めあて」「まとめ」「振り返り」を意識した授業づくりを進めている。

学力向上に向けては家庭学習習慣の定着が重要であると捉え、2013年度から「放課後学習支援」を行っている。元々は県の施策として始まり、週1回、各校で地域の学習支援員による、授業の復習や宿題の指導が行われていたが、同町では地域人材の活用など、独自の方法でさらなる充実化を目指した。学校教育課の藤原文明課長は、当時を次のように振り返る。

「子どもからは、『学校で宿題を終わらせてから帰れるのがうれしい』といった声が聞かれました。しかし、子どもによって学習する教科や内容がまちまちで、学習支援員が教えるににくいケースもあり、学力向上に十分につながらないこともありました」

そこで、2015年度、総務省の「地域おこし企業人交流プログラム」で派遣されたベネッセの地域おこし企業人とともに、学力向上策を検討することにした。

対象教科は、以前から文部科学省「全国学力・学習状況調査」で課題だっ

た算数・数学に絞り、まずは、ベネッセの「総合学力調査」を実施して、課題を詳細に分析した。

「調査結果からは、小学2～4年生の内容でつまずき、そのまま算数が苦手になってしまうケースが多いことが分かりました。文章問題が解けない子どもが多かったのですが、その原因も基礎学力の不足と考えられました」（藤原課長）

さらに、ベネッセの放課後サポーター*1が各校を訪問し、管理職や現場の教員から子どもの実態や課題の聞き取り調査を実施。こうして明らかになった課題に対応した問題をベネッセの既存教材の中から選び、「和気町プリント」（図2）にまとめた。

「教員の意見を取り入れ、スモールステップで徐々に学力を高められるように問題を選びました。一度作成した後、教員に活用してもらいながら、『練習問題の数を増やしたい』『難しい問題も少し入れてほしい』といった細かな要望を取り入れて、最終的に完成させました」（藤原課長）

2015年から、このプリントを基に、週1回、地域の学習支援員や教員が子どもたちを指導している。また、学校によっては授業で活用するケースもあるという。

タブレット端末を活用し、 生徒個別の学び直しも実施

「和気町プリント」に加え、中学校には70台のタブレット端末も整備し、2016年度からは数学の基礎学力



学校教育課長・総括
藤原文明
ふじわら・ふみあき

岡山県内の中学校教諭を経て、2013年度から現職。

定着を図るベネッセの「ドリルパーク」*2を活用した学び直しの学習も進めている。

「ドリルパークは、生徒が個別に小学校低学年までさかのぼり、分からない箇所を学習し直すことができるのが大きな利点です。初めは学習支援員の指導を受けながら『和気町プリント』に取り組み、早く終わった生徒からドリルパークに取り組むようにしています」（藤原課長）

また、小学4・5年生、及び中学1・2年生で「放課後学習支援」を実施してきたが、2015年度にはしっかり基礎固めができる様子が見られたことから、現場の教員や保護者の要望もあり、2016年度からは小学6年生と中学3年生でも実施を始めた。

「毎週継続することで、『来週はここを教えてもらおう』などと、次の学習意欲にもつながっているようです。まだ始めたばかりの取り組みなので、これから明確な成果が表れることを期待しています」（藤原課長）

これらを受け、今後は、算数・数学以外の教科にも広げていきたいと考えている。

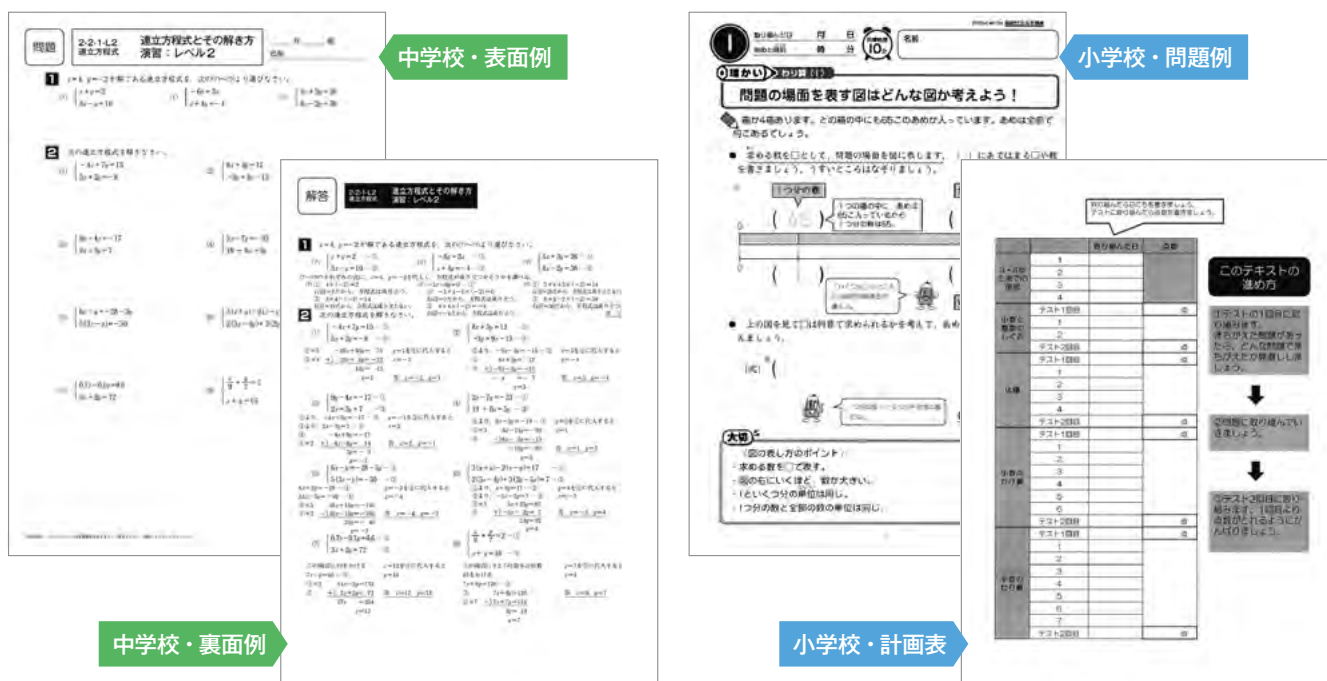
「予算には限りがありますが、削ぎ落とせるプロセスを検討し、できるだけ多くの教科で、持続可能な取り組みを探っていきます」（藤原課長）

さらには、ベネッセの「総合学力調査」も継続的に行い、子どもの実態把握に活用したいと考えている。

「ベネッセの担当者が各校を訪問し、総合学力調査の結果と対策を説

*1 ベネッセが提供する小・中学生向け「放課後子ども教室」のサービスの1つ。放課後の時間に小・中学生の学習や体験などを見守り、支援する。学習支援をベースに、知的好奇心に働きかけるコンテンツや仕組みも幅広く用意。 *2 「ミライシード」の機能の1つ。個別に学習を進めるための国語・算数（数学）・理科・社会・英語（中学校のみ）の教材。子どもが自分の理解度に合わせて内容を選び、学習することができる。

図2 「和気町プリント」(抜粋)



*和気町教育委員会提供資料をそのまま掲載。

明してくれるため、授業改善に生か
せています」(藤原課長)

英語に触れる体験を通して 学習への動機づけを高める

2017年度からは、「教育課程特例
校」(英語特区)として英語教育にも
力を入れている。同町では、2016
年度から町内のすべての保育所や幼
稚園に週1回、ALTを派遣し、園児
が英語に親しむ活動を展開してきた。

「子どもたちはALTとの交流を大
いに楽しみ、保護者からも大変好評
です。ここで芽生えた英語や外国人
に対する興味を持続的に伸ばすため、
小学校では2017年度から高学年の外国語活動に加えて、1～4年生でも英語教育を始めました」(藤原課長)

年間時数は、1・2年生は17時
間、3～6年生は35時間としている。
1～4年生は歌やゲームなどのアク
ティビティを中心に展開し、5・6
年生の『Hi, friends!』に沿った活動
にスムーズにつなげている。

ALTは、小・中学校の各校に1人

ずつ配置。小学校では外国語活動の
指導をメインで担当するほか、図工
や体育など他教科の授業にも入った
り、子どもと一緒に給食を食べたり
と、様々な形で子どもたちとの交流
を深めている。

一方、中学校では、2017年度か
ら従来の英語の授業に加えて、隔週
で1時間、ALTがメインで指導する
「オーラルコミュニケーション」の授
業を新設した。

「以前は、授業で習った内容を実際
に使う機会が少ないことが課題でし
た。この時間を活用して、とにかく
英語を話して聞く場面を多く設定し、
コミュニケーション能力の向上につ
なげています」(藤原課長)

英語によるコミュニケーションの
機会を増やすために、友好都市であ
るカナダのハナタウンや中国の上海
と子ども同士を行き来させる交流も
行っている。そうした体験の場を充
実させることが、町教委の役割の1
つと考えている。

『『自分は将来英語を使わない』『海

外には行かない』などと、自分で決
めつけている子どももいます。その
一方で、外国人との会話で英語が通
じないことを悔しがり、『もっと英語
を勉強しておけばよかった』と後悔
する姿も見られます。教員に『英語
は役立つから勉強するように』と言
われるよりも、体験を通して自分で
感じる方が勉強に向かう動機になり
やすいでしょう。将来、海外で仕
事をするだけでなく、私たちがイメ
ジしているグローバルではありません。
例えば、将来はこの町で農業を
するとしても、海外に留学して新し
い作物や農法を持ち帰ってくるよう
なチャンスがあるかもしれません。
小・中学校での英語教育を出発点と
して、そうした可能性を広げていき
たいと考えています」(藤原課長)

2016年度は中学2年生が、2017
年度は中学2・3年生が悉皆で「GT
EC」*3を受検している。その結果、
話す力や書く力に課題があることが
判明したため、今後のさらなる指導改
善につなげていく考えだ。

*3 ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」「話す」の4技能を測る。

組織的な指導改革を進め、自ら学ぶ積極性を育成

和気町立佐伯中学校



◎ 1959 (昭和 34) 年開校。『三や』の気迫(やる気・やりぬく・やさしさ)を信条に掲げ、心豊かでよりよい社会を実現する人材育成を目指す。

校長 香山浩一郎先生

生徒数 56 人

学級数 4 学級 (うち特別支援学級 1)

電話 0869-88-1319

URL <http://saeki-jhs.wake.schoolweb.jp>

「放課後学習支援」を通して家庭学習習慣の定着を図る

和気町は、吉備高原から連なる山々に囲まれ、果物や野菜の栽培が盛んな地域だ。和気町立佐伯中学校の生徒も、自然豊かな環境で伸び伸びと育ち、素直な性格で学習には真面目に取り組む姿が見られる。その半面、幼い頃から同じ顔ぶれの中で育つために人間関係が固定化し、競争意識が育ちにくいことが課題だと、香山浩一郎校長は述べる。

「勉強でも運動でも、『自分はこれくらいだ』『どうせ勝てるはずがない』など、自分の可能性を狭めてしまう姿が見られます。そのため、自分に自信を持ってチャレンジする気持ちを育てることを大切にしています。チャレンジ精神が芽生えれば、学習にも一層意欲的に取り組めると考えています」

同校が、2013年度から町の方針に沿って力を注いでいるのが、「放課後学習支援」だ。放課後は部活動に熱心に取り組むため、帰宅後は疲れて机に向かえない生徒が多く、また、家庭ではスマートフォンやテレビ、

ゲームなどのメディアに接する時間が長いことも、家庭学習の妨げとなっていた。そうした課題を踏まえ、部活動を休みとしている木曜日の放課後に「放課後学習支援」を行う。教務主任で研究主任の宇津見雅英先生は、次のように説明する。

「当初は半数ほどの生徒は帰っていましたが、教員の積極的な声かけにより、今ではほぼ全員が参加しています」

学習支援員との交流が学びに向かう気持ちを支える

現在、地域ボランティアによる学習支援員には7人が登録しており、毎回、数人が来校して生徒を指導している。このように、地域の人々が積極的に学校の活動に参加する背景には、日頃の関係づくりがある。

「地域の清掃活動や高齢者施設への慰問など、生徒が校外活動に積極的に参加するようにしています。学校が地域に出ていくからこそ、地域の人々もまた、校内に入っただけののだと考えています」(香山校長)

学習支援員には、生徒が自分で考えて解決する力を育てるために、分



校長
香山浩一郎
かやま・こういちろう

モットーは、「『夢は人生を創る』を信条に、何事にもプラス思考でチャレンジする生徒を育てる」



教頭
大隅 万
おおすみ・よろず

モットーは、「どの生徒にも温かい、地域に根差した学校をつくる」



教諭
宇津見雅英
うつみ・まさひで

教務主任、研究主任、数学科。モットーは、「目指す生徒像の実現に向け、高め合う教職員集団をつくる」



教諭
西岡 升
にしおか・のぼる

2学年主任、英語科。モットーは、「コミュニケーション能力が身につく英語教育を目指す」

からない問題があってもヒントを与える程度にし、すべてを教えないようにとお願いしている。そうすることで、生徒は自分で考えようとして、家庭学習にもつながっていくと考えている。こうした指導方法は、放課後学習支援を開始した当初、ベネッセ主催の学習支援員を対象に実施された研修でも伝えられた。

学習支援員との交流は、生徒にとって貴重な体験になっているともいう。

「学習支援員は、問題の解き方を教えるだけではなく、学習の仕方をアドバイスしたり、自身の中学校時代の体験を話したりと、生徒に様々な学びを与えています。皆さんが愛情を持って接してくださるので、生徒には『自分は地域の人々に支えられ

ている』という気持ちが生まれていると思います」(宇津見先生)

「放課後学習支援」には、定期的に現役の高校生も学習支援員として参加している(写真)。

「生徒は年齢が近い先輩に教えてもらえることが非常にうれしいようです。同世代だからこそ、教員よりも分かりやすく教えられることもあります。高校生は教職を目指す生徒の参加が多く、互いにより学びの場になっています」(宇津見先生)

2015年度からは、ベネッセの協力で町教委が用意した「和気町プリント」を活用するようになり、学力向上が進んでいる。大隅万教頭は次のように語る。

「学力面では、特に応用力の高まりが見られます。さらに、家庭学習の習慣化が進んでいることも大きな成果です。家庭学習時間が1時間未満の生徒は、2015年度には23%いましたが、2016年度には10%にまで減りました」

今後は、「和気町プリント」とタブレット端末との併用により、さらなる学力向上を目指す考えだ。

「英語特区」として 英語教育改革に着手

2017年度に同町が「教育課程特例

校」(英語特区)に指定されたことを受け、英語の授業改善を進めている。

ALTが主導する隔週1回の「オーラルコミュニケーション」の授業は、教員の指示を含めて日本語を一切使わずにコミュニケーション活動を進める。英語科の西岡^{のぼる}先生は次のように説明する。

「買い物など、実際の場面を想定した活動を通して、できるだけ多くの英語を使ってコミュニケーション力を高めていきます。型通りの練習ではなく、リアクションの仕方など、実際の会話に近い形式で活動を繰り返しています」

通常の英語の授業は英語科教員が主導し、ALTはT2として入る。西岡先生は、生徒のコミュニケーション力をさらに高められるよう、「オーラルコミュニケーション」の授業と関連づけ、授業中は極力日本語を話さないようにしている。

「複雑な文法の解説などを除き、基本的には英語で授業を進め、生徒にも日本語を使わないように指示しています。生徒がスピーチをして英語で質疑応答をするなど、4技能を統合した活発な活動になるように心がけています」(西岡先生)

今後は、小学校と連携した英語教育を行うことも予定している。

「中学生が小学校の英語の授業に参加し、英語の絵本の読み聞かせをするなど、子ども同士の交流活動も実施したいと考えています」(香山校長)

教員を3チームに分けて 組織的な授業改善を実施

同校は、英語科に限らず、各教科の授業改善にも積極的だ。教員は、学期に1回は公開授業を実施。管理職を含めた全教員を3チームに分け、各教員が同じチームの教員の公開授業を必ず見学することになっている。

「教員の教科や年齢層が異なるよう、チームを編成しています。以前から公開授業を実施していましたが、多忙のあまり、すべてを対象とするとは参観できないことが続きました。そこで、チーム内では必ず見学するというルールを設けたところ、授業改善が進み、より高め合える教員集団となりました」(宇津見先生)

これからの組織的な取り組みにより、生徒の力を伸ばしていく考えだ。

「教員が同じベクトルで指導にあたれば、生徒や保護者にも学校の目指すところが伝わりやすくなります。教員や生徒、保護者が一体となり、学校全体の教育力を高めていき、生徒の可能性を広げていきたいと考えています」(香山校長)



写真 左は1年生、右は3年生の「放課後学習支援」の様子。1年生はグループで教え合い、にぎやかな雰囲気の中で学習を進めていた。一方、3年生は個別に取り組み、分からない問題があると挙手をして学習支援員や教員に助言を求めるなど、学年ごとに雰囲気が異なっていた。この日は、ALTや和気岡谷高校の生徒も学習支援員として、各学年の教室で指導にあたった。

公・私立の枠を超えて小・中の教員が集い、指導力を高め合う授業研修会を実施

愛知県豊明市教育委員会・私立星城中学校

2017年6月、愛知県豊明市内の公・私立の小・中学校教員が一堂に会する授業研修会が行われた。これは、同市教育委員会と私立星城中学校が、地域全体の教育力の向上を図り、新学習指導要領への対応や小中連携などを強化しようと呼びかけて実現したものだ。研修会の様子をレポートする。

研究授業の様子

ICTを活用した英語と理科の授業を公開

愛知県豊明市と市内の私立・名古屋石田学園（星城中学校・高校）は、包括連携協定を結び、教育・スポーツ文化活動などへの相互支援を行っている。その一環として、星城中学校が推進中のICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業に関して指導方法等を他校と共有しようと、市内の公立中学校との合同授業研修会（以下、本研修会）を企画した。また、新学習指導要領での小学5・6年生の英語教科化を視野に入れた小中連携の強化を図るため、市内の公立小学校にも参加を呼びかけたところ、研修会当日は小学校5校、中学校3校から、管理職を含めた教員15人が同校に集まった。

本研修会は、同校の教員による研究授業と、その授業についての研究協議という構成だ。研究授業は1年生の英語科、2年生の理科で行われ、生徒一人ひとりがタブレットを持って効果的に活用しながら進められた。

英語の授業は、自己紹介を通して一般動詞と疑問詞への理解を深めることをねらいとして行われた。まず、タブレットに入っている「Classi」*を用いて自己紹介の原稿を作成し、それを読み合うペアワークを行い、そ

愛知県豊明市プロフィール

◎愛知県中央部に位置する。名古屋市東南部に隣接し、ベッドタウンとして発展した。織田信長が今川義元を破った桶狭間古戦場がある。

人口 約7万人 面積 23.22km²

公立学校数 小学校9校、中学校3校

児童生徒数 約5,300人

電話 0562-92-1111（代）

URL <http://www.city.toyoake.lg.jp/index.html>

星城中学校プロフィール

◎1993（平成5）年に開校。隣接する星城高校との併設型中高一貫教育を行う。高校は、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」のアソシエイト校に指定されている。

校長 水野謙二先生

生徒数 74人

学級数 3学級

電話 0562-97-3121

URL <http://www.seijoh-jr.com/>

の様子を互いのタブレットで撮影する（写真1）。次に、その動画を見て、自身の原稿を読む速さや声の大きさなどを確認しながら、個人ワークでの練習を繰り返す。授業の後半には、1人ずつ教室の前に出て英語で自己紹介を行ったが、その際には、全員が原稿を見ずに話し、ほかの生徒からの質問にも臨機応変に答えていた。

理科の授業では、まず、教員が砂糖に硫酸をかける実験を行ったが、この時に生徒はタブレットの録画機

能を用いて化学反応の様子を撮影した。生徒は、どのような化学反応が生じたのかをグループで話し合いながら考察し、化学反応式にまとめていく。さらに、各自が撮影した動画を見直し、考えを深める様子も見られた（写真2）。授業中に数回設けられた中間発表では、教員が生徒の意見を聞きながら、考察のポイントを整理。生徒が書いた化学反応式はタブレットで共有され、最終的には全員が実験での化学反応の構造を理解



▶写真2 生徒はタブレットを持って教室を自由に歩き、あちこちでグループをつくって話した。



* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

できた。最後に生徒一人ひとりが化学反応式をタブレットに書き、Classiで教員に提出して授業は終了した。

研究協議の内容

教員が互いに授業観を示し、生徒の学びの深化を目指す

研究協議（写真3）では、研究授業を担当した英語科の澤田満先生と理科の近藤英章先生から、授業の工夫点について説明があった。澤田先生はペアワークでの学び合いを軸にした点、近藤先生は生徒の興味・関心を引きつけようと、授業の冒頭で実験を行った点を挙げた。また、両先生ともに、生徒の学びを深めるために、タブレットの録画機能を有効に活用していることを強調した。

続く参観者との質疑応答では、最初に英語の授業について、小学校教員から「生徒の自己紹介に文法的な



写真3 研究協議は50分間行われ、そのうち約30分間が質疑応答に充てられた。小・中学校の各教員から質問が次々に出されていた。

誤りがあった際は、その生徒に指導するだけでなく、何が間違っているのかをクラス全体で共有すべきだったのではないか」という質問があった。これに対して、澤田先生は、「普段は共有、解説しているが、今日は授業の進行に気を取られてしまった。重要な指摘なので、今後はより意識していきたい」と答えた。また、理科の授業については、中学校教員からの「ICT活用により、授業はどのように変わったと思うか」という

質問を受け、近藤先生は、自身が感じている最大の変化として、「話し合いが活性化し、生徒が一層意欲的になった」という生徒の変容を挙げた。小学校教員からの「定着度に差が見られる場合、教員が教えた方がよいのではないか」という質問には、「生徒自身での気づきを重視し、学び合いをなるべく多くしている」と近藤先生自身の考えを述べた。

最後に、同市教育委員会学校支援室の下出修史室長が研究授業を講評し、「授業の終わりにクラス全体での振り返りの時間を設けると、成果や課題が共有され、より効果的な主体的・対話的で深い学びが実現するだろう」というアドバイスを述べた。

公・私立の枠を超えて教員が交流する研修会は、広い視野で他校と成果や課題を共有し、授業改善を進める原動力となることが期待される。今後の進展を注視していきたい。

授業研修会の今後に向けて

教育委員会との連携を強化し、公・私立一丸となった授業改善の推進を目指す

本研修会は、包括連携協定の下、本校の授業改善の取り組みが他校の参考になればと、教育委員会の指導を仰ぎながら、市内の公立中学校と企画しました。教育委員会からは公立小・中学校に書面で告知してもらう一方、安田英和星城高校校長とともに各校を訪問して、参加を呼びかけました。研究協議では、研究授業に対して、他校の先生方が「自分ならばどうするか」を語る場面も見られ、本校内で行う研修会よりも踏み込んだ議論になり、得るところが多くありました。また、英語の教科化に向けた小学校の先生方の意気込みもよく伝わり、中学校が小学校との連携を進める際の参考になったと思います。

今後は、小学校英語の教科化により、中学校入学時の



私立・名古屋石田学園星城高校副校長
星城中学校校長

水野謙二 みずの・けんじ

愛知県立岡崎高校進路指導主事、同安城南高校教頭、同御津高校校長、同西尾高校校長等を経て、現職。

生徒の英語力も変わっていくでしょう。中学校では、小学校での学習内容をよく知り、英語力をさらに伸ばせるように工夫しなければなりません。中学校同士の意見交換も一層重要になっていくと思います。そのためにも、公・私立を超えた小・中学校教員の交流は、今後も継続していきたいと考えています。本研修会は各校持ち回り実施も1つの方法ですし、公立の合同研修会に本校の教員が出席するという方法もあるでしょう。先生方が取り組みやすい形になるよう、検討を重ねていきます。

子どもの学力の育成は、すべての学校の目標です。公・私立が一丸となって取り組めるよう、教育委員会との連携をさらに密にしていきたいと考えています。

主体的・対話的で
深い学びを実現！

アクティブ・ラーニング 実践講座

中学2年生・英語

協同性を重視した活動で 生徒の気づきを促し、 発信力・傾聴力を育む

英語の授業では、4技能の総合的な育成のため、4技能を統合的に活用する言語活動中心の指導が求められている。その対応に向け今回は、英文で書いた「自分史エッセイ」を基に、最終的にペアで自然な対話ができるように指導することで、生徒の「発信力・傾聴力」を高めようとした授業を紹介する。その中でも特に、課題設定や活動の流れ、場づくりの工夫を取り上げる。

単元計画 中学2年生・英語「『自分史エッセイ』を英語で伝える」

ねらい 既習の英語表現を用いて「自分史エッセイ」の原稿を作成し、モデルの英語表現等を参考にして自然な対話になるよう工夫して話したり聞いたりできる。

育みたい資質・能力 コミュニケーション力（特に発信力、傾聴力）

時数	概要	学習内容・活動
1	Teacher's introduction	先生の「自分史」を英語で聞き、その内容に関する質問に答え、ペアでその内容について話す。
2	First Writing	自分のこれまでの歩みについて、質問に答える形で英文を書く。〈第1稿〉
3	Peer Editing	友だちの英文を読んで交流し、文を書き足すヒントを得る。
	Second Writing	友だちや先生からのアドバイスを基に、より詳しく英文を書く。〈第2稿〉
4	Common Errors	Second Writing で見られた共通の間違いを参考にして、自身の英文を修正する。
5	Tips for speaking test	モデルの会話を見て、それを参考に、次の授業でのスピーキングテスト本番に向けた準備をする。
6	Speaking Test	自分のこれまでの歩みについて書いた英文を基に、先生やALTと3分間、英語で対話をする。

授業者

福岡県立
輝翔館中等教育学校

西里勇希 にしざと・ゆうき

教職歴4年。同校に赴任して4年目。2学年担任。教務担当。英語科。高校採用で、新採後2年間は高校段階を受け持ち、2016年度から中学校段階を担当。

実践校

福岡県立輝翔館中等教育学校

◎ 2004（平成16）年開校。県内唯一の県立の中等教育学校。2016年度から「福岡県立学校『新たな学びプロジェクト』」の研究開発校に指定され、ICT機器を活用した学力の充実に取り組んでいる。

校長 山田和弘先生

生徒数 623人（6学年分）

学級数 18学級（6学年分）

電話 0943-42-1917

URL <http://kishou.fku.ed.jp>

今回取り上げる授業 モデルの会話を見て、テスト本番に向けて準備をする

学習内容（時間配分の予定）	学習の主な目標	具体的な活動内容
1 導入（17分）	発音練習やスピーチなどで、メインの活動への準備をする。	SMALL TALK ^{*1} 、Bingo ^{*2} 、「Show and Tell」speech ^{*3} などを行う。
2 3 モデルの提示（10分）	次時のスピーキングテストでの目標を明確化させる。	教員とALTによる、スピーキングテストのデモンストレーションビデオを見て、気づいた点を発表する。
個人練習（5分）	ペアワークの前に自分で確認する。	前時までに書いた「自分史エッセイ」の原稿を見ながら、個人で対話の練習をする ^{*4} 。
4 5 ペアワーク（16分）	ペアでスピーキングテストに向けた練習に取り組む。	相手を替えて3回 ^{*4} 、各回で目的を持たせて、対話の練習をする。各回の練習後に、相互に相づちやシャドーイング ^{*5} が何回できたかを確認し、コメントも書く。
6 まとめ（2分）	本時の振り返りをし、次時の学習事項を確認する。	振り返りシートに本時の取り組みの自己評価を書き込む。

* 輝翔館中等教育学校提供資料から抜粋し、編集部で作成。

*1 主に「聞く」「話す」の2技能の育成を目的に、単元の言語材料を基に、与えられた内容について、質問者と回答者を決めてペアで英会話をする活動。本時の授業では、誕生日や性格、好き嫌いなどが質問された。

*2 西里先生の授業では、生徒が単元に出てくる単語をビンゴカードのマスにあらかじめ書いておき、単語の発音練習をした後、ビンゴゲームをしている。

*3 大勢の前でテーマに沿って話す活動のこと。西里先生の授業では、ゴールデンウィークの課題として出された「自分が好きなもの」について全員が書いて提出した英文の内容を、先生が添削した上で、毎回1～2人の生徒が英語の授業の帯活動の時間にスピーチをしている。

*4 実際の授業では、時間の関係で、個人練習と、ペアワークの1回分を省略した。

*5 相手の発言を即座に復唱すること。

1 授業開始（帯活動）

▶▶▶ 15分



授業の導入には、帯活動として、単元の言語材料を基にしたペアワークの SMALL TALK、単元に出てくる単語を用いた Bingo、生徒が自分の好きなものを紹介する「Show and Tell」speech（今回は釣りがテーマ）を行っている。speech では、生徒の話に出てきた重要表現を、先生が取り上げて解説。聞く側の生徒にはスピーチの姿勢や内容について、評価とコメントを書かせた。

2 モデルの提示

▶▶▶ 10分



本時のメイン活動は、次時のスピーキングテストに向けて繰り返し練習すること。目標は「自分の体験談や感想を交えながら、自然な対話ができるようになること」と先生が説明し、そのモデルとして、先生とALTによる対話の映像を流す。1回しか流さないこと、気づいた点を後で発表してもらうことを事前に伝えたところ、生徒は脇目も振らず集中して視聴していた。

主体性を引き出す工夫

生徒同士の学び合いで 生徒自身の気づきを促す

「新たな学びプロジェクト」の研究開発校2年目の福岡県立輝翔館中等教育学校は、ベネッセの「Classi」*6「ミライシード」*7などのICTを活用した主体的・協同的な学びをテーマに研究に取り組んでいる。

今回紹介する授業はその校内研究で行われた、西里勇希先生が独自に設定した発展的な単元の1コマで、既習の過去形や接続詞、未来形などを用いて、英語4技能を統合的に活用する言語活動を行うものだ。

「自分で実際に英語を使って練習を積み重ねないと、英語力は身につけません。そこで、教員が教え込むのではなく、まずは生徒が自ら話したくなる題材を設定して、4技能を統合した活動を行い、生徒にできるだけ多くの英語を使わせるような授業を心がけています」（西里先生）

西里先生が今回の授業で工夫したのは、生徒が大切な点に自ら気づき、

修正しながら、段階的に学習を積み上げていくことだ。授業の到達目標を「相手と自然な対話ができること」とし、そのために「自分の体験談や感想を交えて話す」「原稿を見ないで相づちやシャドーイングを入れる」を行動目標として設定した。

「今回のテーマは『対話』なので、話し手だけでなく、聞く側の姿勢にも注意を促しました」（西里先生）

そして、生徒に自然な対話のポイントに気づかせるため、ALTと先生が対話をしている映像を視聴させ、自然な対話になっている理由をワークシートに書かせて、発表させた。

さらに、今回はペアワークを3回行うこととし、到達目標の達成に向けて3つのスモールステップを設定。ワーク前にはその都度、先生が小目標を説明して生徒に意識させ、ワーク後は振り返りシートに達成度合を自己評価させ、さらに相手に対する気づきのコメントも書かせた。こうすることで、1回目より2回目の方が、生徒の活動も活発化していた。

「気づきを反映させながら段階的に

練習させることで、相手と自然な対話ができるようになるとともに、最後の時間に行うスピーキングテストに向けて自信をつけてほしいと考えました」（西里先生）

また、対話の準備として、前時まで3コマかけて、「自分史エッセイ」を80語以上の英文で書いた際にも、生徒同士で互いの英文のエッセイを読み合っ、文法や単語の間違いを指摘し合う活動を行った。

「生徒同士の学び合いは、英語が苦手な生徒の学びになるのはもちろん、得意な生徒にとっても他者に教えることで学びがあります。生徒が自ら気づき、学んでいけるよう、生徒同士の添削後も、私がそれをチェックするのではなく、多かった間違いを集約して次の授業で提示することで、再度、生徒の気づきを促しました」（西里先生）

対話の場づくりへの配慮

ペアを毎回替えて 誰とでも話せる力を育む

授業では、生徒の発信力・傾聴力

*6 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*7 「ムーブノート」「話し合いトレーニング」「ドリルパーク」の3つのアプリケーションで構成された、ベネッセのタブレット学習プラットフォーム。

3 到達目標の確認

▶▶▶8分



生徒は視聴した映像の会話の内容をワークシートに書き、指名された生徒が発表して聞き取れたかを確認。さらに、自然な対話になっていた理由を問いただけると、生徒から「具体的に話していた」「相づちを打っていた」などが挙がった。それを受けて先生は、「体験談を入れる」「相づちは3回以上、シャドーイングは1回以上」と具体的な目標を提示し、生徒に改めて意識させた。

4 ペアワーク①

▶▶▶8分



前時までに書いた「自分史エッセイ」を基にペアワークを行う。1回目に気をつけるのは「制限時間の3分間」と「相づちやシャドーイングを使うこと」。質問側は質問カードを見ながら“When were you born?” “What do you like now?”などと尋ね、回答側は原稿を見つつ答える。ワーク後は振り返りとして、相づちやシャドーイングの回数と、相手へのコメントを書いて渡した。

を育むため、ペアワークを多用し、生徒同士の助け合いを重視している。しかも、授業ごとに席替えをし、ペアワークの相手が毎回替わるようにしている。1年次は生徒の人間関係を考慮して先生が席順を決めていたが、2年次ではランダムにした。その理由を、西里先生はこう説明する。

「生徒が将来英語を使う際には、初対面の人と話すことも多いと思います。誰とでも友好的なコミュニケーションができるよう、授業ではあえていろいろな生徒と組ませています」

この方法は、クラス内の人間関係が良好でなければうまくいかない可能性もあるが、互いが伸びるために

サポートし合うことの意義やメリットを生徒に伝え続けながら、あえて行っている。同校の校内研究のアドバイザーを務める久留米大学の安永悟教授は次のように語る。

「このクラスでは互恵的な活動ができていて、西里先生の指導によって協同学習が生徒に浸透している様子がうかがえました。ただし、できていない生徒もできているように見えることもあるので、活動の様子を丁寧に見取る必要があります」

ペアワークの机間巡視では、西里先生は注意が必要そうなペアを中心に見て回る。また、生徒が相手の発言を聞き流していないか確認するため、

「どんな内容を話していた？」と聞き手に投げかけるなどして、意味のある活動になるよう支援している。

また、活動中の生徒の目線までしゃがみ込んで、寄り添う姿も見られた。

「教員がそばに立って見下ろしていると、生徒は威圧的に感じ、英語が苦手な生徒は萎縮してしまいます。生徒が少しでもリラックスできるよう、なるべく生徒と同じ目線で話すようにしています」(西里先生)

活動時以外にも、西里先生は協同学習に向けた場づくりのため、生徒全員が活躍できる場面をなるべく作るようにしている。授業の導入で行う「Show and Tell」speechもその1つだ。また、担任のクラスでは、帰りの会で、部活動の大会に出場する生徒に意気込みを発表させて、全員で応援するなど、生徒が自分のことを話す場面を意識的に設けている。

「協同学習では、生徒が自己肯定感を持ち、さらに互いを認め合っていることが大切です。普段の学級づくりから、生徒が活躍できる場を増やしています」(西里先生)



写真1 ペアワークでは毎回組み合わせを替えるため、あいさつを重視。席を移動後、“Hello!”とあいさつしてから活動し、終わるとハイタッチをしてお礼を言ってから、次の席に移動する。



写真2 黒板には「今日のめあて」など最後まで残しておきたいことを書き、電子黒板には活動のルールなど、その場限りのことを映すというように、使い分けている。

5 ペアワーク②

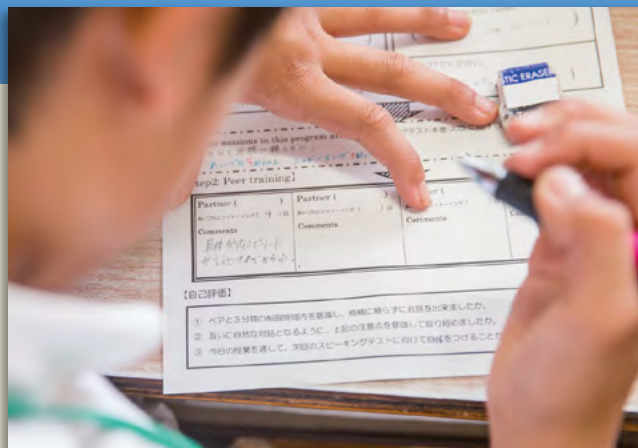
▶▶▶7分



2回目は、「相手の話を理解した上で相づちやシャドーイングをすること」を意識するよう伝える。さらに、1回目のワークで先生が気づいたこととして、人の話を聞く時に腕組みや肘つきをすると、否定的な態度に見えることを説明した。その後、相手を替えて2回目スタート。1回目よりも全体的に声が大きく、相手の目を見て、原稿を見ずに話そうとする姿があちこちで見られた。

6 本時の振り返り

▶▶▶2分



2回目のワークが終わると、再度振り返りシートに相づち・シャドーイングの回数と、相手へのコメントを書いて、相手に渡した。そして、授業全体の振り返りとして、3つの項目(本文「授業を終えて」を参照)について3段階で自己評価をし、先生に提出した。最後に、先生が、次のテストに向けて練習するためのペアを発表し、ペアで協力して準備をしておくように伝えた。

授業を終えて

主体的に学ぶきっかけづくりをしていきたい

授業の最後には毎回、本時の目標到達度について3段階で自己評価をさせている。今回は、①制限時間の3分間を意識して、原稿に頼らずに会話ができたか、②自然な対話となるよう注意点に気がつけたか、③テストに向けて自信がついたかだ。「できなかった」をつけた生徒は②③ではゼロだったが、①は8人いた。

「生徒の意欲は高かったのですが、3回練習する予定が2回しかできなかったこともあり、原稿を見ずに話すことには不安が残るという結果でした。今後の課題です」(西里先生)

授業の事後協議会では、「深い学びとは何か」が話題となった。そこで参加者から出てきた意見を踏まえて、西里先生は次のように語る。

「今回の授業では『主体的』『対話的』の観点ではうまくできたと思いますが、『深い学び』については私自身、課題意識がありました。『深い学

びとは?』を日頃から考えていましたが、今日の協議会で、『もっと学びたい』という意欲が高まるなど、生徒の学ぶ姿勢に変化が見られることが、深い学びの表れなのだと気づきました。授業だけで英語力を育てる

ことには限界があります。国内外の人とコミュニケーションできる人材を育むという目標に向けて、授業では、英語力の土台づくりとともに、卒業後も主体的に学べる人となるきっかけづくりをしていきたいと思います」

アドバイザーが語る 実践のポイント

最初にゴールイメージを持たせることが大切

西里先生は発問の仕方が上手で、授業のテンポがよく、活気もあります。特によかったのは、誰とペアになってもスッと活動に入り、互いが伸びるためにサポートし合うという、協同の精神が生徒に浸透していたことです。前回授業を見た時よりも生徒が育っていると感じました。

改善点としては、今回のモデル映像を単元の最初の授業で見せるとよいでしょう。「アクティブ・ラーナー」を育むという大きな目標を考えると、生徒には、初めに単元のゴールを見せて見通しを持たせ、活動の目的を常に意識させることが大切です。また、この後行われるスピーキングテストを撮影し、うまくできた生徒の映像を次年度にモデルとして最初に提示する方法も考えられます。先輩の実例を見れば、生徒はより具体的にゴールをイメージできるはずです。

西里先生が、さらに指導力を高めるためのステップとしては、まず育てたい人材像を明確にし、そのために今何をすべきかを考えて授業に落とし込むことが大切になります。アクティブ・ラーニングも英語4技能統合も、授業の手法の1つに過ぎません。大きな目標を見据えながら、日々の授業をしっかりと進める。この両方があってこそ、生徒は大きく成長していくのです。



久留米大学文学部
教授

安永 悟

やすなが・さとる

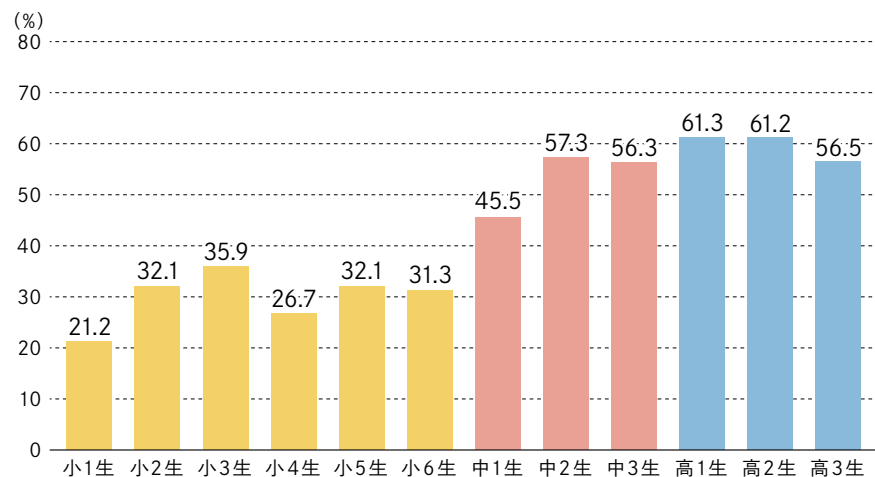
九州大学助手等を経て現職。専門は、教育心理学、協同教育。著書に『活動性を高める授業づくり』(医学書院)など。

子どもたちを 「勉強好き」にするには

今回取り上げるのは、子どもたちの学習意欲（勉強の好き嫌い）に関するデータです。同一親子の1年間の追跡調査から明らかになった、「嫌い」だった勉強が「好き」になった子どもの特徴をご紹介します。

1 学年が上がると増える勉強「嫌い」、中学2年生で半数超

図1 勉強が「嫌い」の比率（学年別、2016年7月）



注1) 「あまり好きではない」 + 「まったく好きではない」の合計。

注2) 小1～3年生は保護者の回答。「お子様は『勉強』がどれくらい好きですか」と尋ねている。

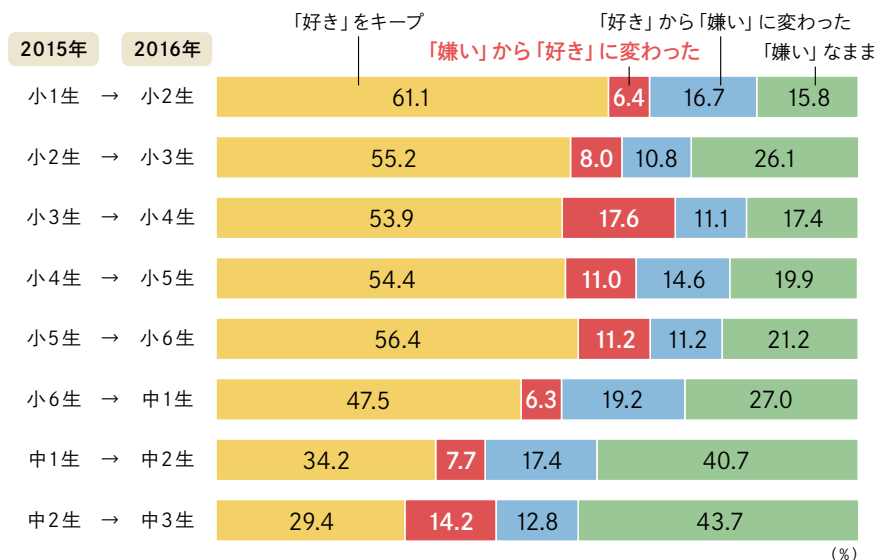
注3) 小4生～高3生は子どもの回答。「あなたは『勉強』がどれくらい好きですか」と尋ねている。

勉強が「好き」であることは、子どもたちが中学校や高校を卒業した後も、自ら学び続ける上で重要な要素である。しかし、小・中・高と学校段階が上がるにつれて、徐々に勉強「嫌い」が増えていく（図1）。

学年別に詳細を見ると、小学1年生から6年生までは、勉強が「嫌い」（好きではない）の比率は2～3割台にとどまっているが、小学6年生から中学2年生にかけて26ポイント増加し、中学2年生以降は「嫌い」が5～6割台と過半数を占める。つまり、勉強が「嫌い」なまま中学校や高校を卒業する子どもたちが多くいることが分かる。この「嫌い」の増加を食い止め、勉強「好き」な子どもを増やす鍵はどこにあるのだろうか。

2 1年の間に「嫌い」だった勉強が「好き」になる子どもが約1割

図2 勉強の好き嫌いの1年間の変化（学年別、2015年7月→2016年7月の1年間）



注1) 「とても好き」「まあ好き」を「好き」、「あまり好きではない」「まったく好きではない」を「嫌い」として、2015年7月と2016年7月の変化を示している。無回答・不明の人は除いている。

注2) 小1～3年生は保護者の回答。小3生→小4生の変化は、保護者の回答と子どもの回答を用いている。

そのヒントになるのは「嫌い」だった勉強が「好き」になった子どもたちの存在だ。この調査では、同じ子どもを追跡し、勉強の「好き」「嫌い」が1年間でどう変化したかを見た（図2）。

すると、小学生だけでなく、勉強嫌いが半数を超える中学2年生以降にも、勉強が「嫌い」から「好き」に変わった子どもが、各学年おおむね1割前後いることが分かる。子どもたちは勉強が「嫌い」になるばかりでなく、何かのきっかけで「好き」になることもあるのだ。

また、データは提示していないが、この子どもたちは、勉強が「好き」になっただけでなく、ほかの子どもたちに比べて、前年よりも学習時間を増やしており、成績も上昇していた。そうしたきっかけづくりをどのように支援するかが大切だ。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2016」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの第1回調査（2015年実施）と第2回調査（2016年実施）。毎年、小学1年生から高校3年生の親子約2万1000組に調査し、同一の親子の成長のプロセスや成長に必要な環境・働きかけを明らかにする。今年7月に第3回調査を行う予定。

◎詳細は下記ウェブサイト（プロジェクトの進行状況）をご覧ください。
<http://berd.benesse.jp/special/childedu/>

データ解説

ベネッセ教育総合研究所
研究員

橋本尚美

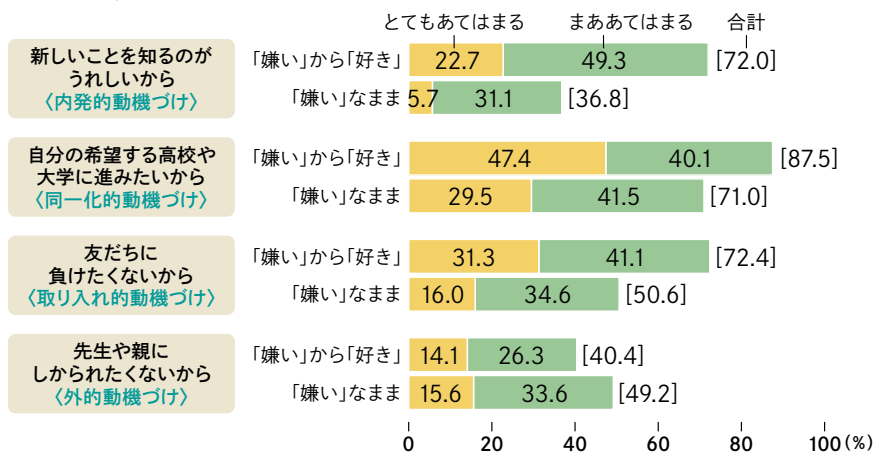
はしもと・なおみ

初等中等教育領域の子ども、保護者、教員を対象にした意識や実態の調査研究を担当。子どもの文化世界や学びの実態、子どもの成長環境としての社会・学校などに関心を持っている。



3 子どもたちを勉強「好き」にする多様な経験のサポートを

図3 勉強する理由（学習動機づけ）（中学生）

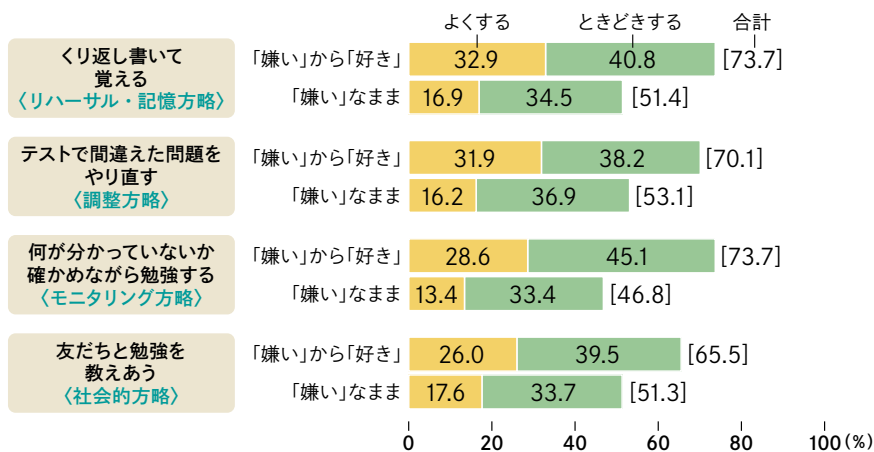


好きになった子には多様な学習動機

以下では、小・中学生がほぼ同じ傾向のため、中学生のデータを基に解説する。

図3を見ると、勉強が「嫌い」から「好き」になった子どもは、「新しいことを知るのがうれしい」（内発的動機づけ）、「自分の希望する高校や大学に進みたい」（同一化的動機づけ）など様々な学習動機を強く持っている。それに対して、「嫌い」なままの子どもは「しまわれたくない」（外的動機づけ）を理由にする比率が高い。

図4 勉強方法（学習方略）（中学生）



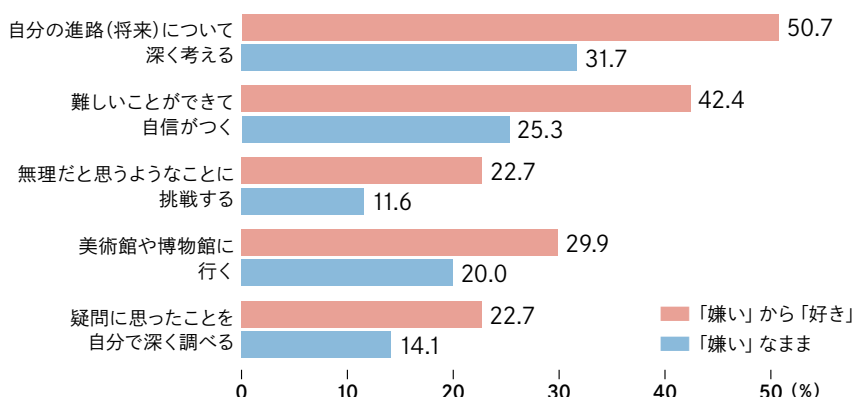
効果的な勉強方法の工夫も鍵

また、図4を見ると、勉強が「好き」になった子どもは、「何が分かっていないか確かめながら勉強する」（モニタリング方略）などの様々な勉強方法を活用している。効果的な勉強方法を身につけることが、学習の理解度を高め、子どもの勉強好きを促進すると思われる。

さらに、図5では、勉強が「好き」になった子どもは、「進路（将来）について深く考える」などの割合が、「嫌い」なままの子どもよりも高いのが特徴である。

子どもたちがいつまでも勉強好きでいられるように、学校や保護者、そして周囲の大人には、学ぶうれしさを感じる機会を多く与えたり、効果的な学習方法をアドバイスしたりなど、多様な経験をサポートし、将来にわたって学び続ける姿勢を育ててほしい。

図5 この1年間に経験したこと（中学生）



注1）図3の「学習動機づけ」は学習意欲を高めて行動に向かわせること、図4の「学習方略」は学習効果高めるために意識的に用いる勉強方法のこと。

注2）図3～5は、勉強が1年間で「嫌い」から「好き」になった子どもと「嫌い」なままの子どもの2016年7月の数値。[]内は合計。

注3）図5は複数回答。23項目のうち差の大きい5項目を示した。

Reader's VIEW

2017 Vol.1 特集「次期学習指導要領を読み解く」へのご意見

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』教育委員会版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト (<http://berd.benesse.jp/>) でご覧いただけます。

◎学習指導要領の改訂は、教育委員会や各学校にとって喫緊の課題であり、それを理解する上で特集の7つのキーワード解説はとても分かりやすいものでした。本地域は学校組織が非常に小さいので、カリキュラム・マネジメントとコミュニティ・スクール導入の必要性を感じています。その方向性の正しいことが確認できました。(秋田県)

◎特集の7つのキーワードのうち、特に「社会に開かれた教育課程」の理念がよく理解できました。その実施にあたっては、地域の人的・物的資源の活用や、放課後・土曜日等を使う社会教育との連携が大切です。学校教育を学内で閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが必要ですね。今の本校の取り組みの延長線上にあると安心しました。(大阪府)

◎特集事例の茨城県つくば市「つくばスタイル科」は、小・中9年間を通じた教科ごとの指導が、系統的でよく練られていました。言語力・協働力のスキル育成も効果的に見えます。まさに、今回の学習指導要領改訂の重点が押さえられているようでした。(神奈川県)

◎特集のキーワード「小学校英語の教科化」については、学校現場では授業時数の捻出が課題です。いろいろな方策が考えられますが、子どもの英語に対する学習意欲を失わせないように留意することが大切で、そのためにも教員の授業力向上が重要です。本市も、連携する中学校の英語科教員との交流や相互授業参観等を実施して、自信を持って授業を行えるようにしていきます。(東京都)

◎「小学校英語の教科化」に際しては、特集の東京都武蔵村山市立雷塚小学校の事例だけでなく、どの小学校にも戸惑いがあると思います。そして、この事例のポイントは「英語活動支援員」の存在です。今後は、こうした支援員の普及が重要になるのではないのでしょうか。(滋賀県)

◎連載「学力向上へのステップ」の岡山県備前市では、産学官の3者の協力関係で成果を上げている点が素晴らしいと思いました。教育委員会だけの事業では、教員にさらなる多忙化を強いるかもしれませんが、企業や大学から協力を得られれば、大きな力になると納得しました。(宮城県)

◎連載の岡山県備前市の取り組みでは、ICT活用によって学びの質が向上しており、大変うらやましく思いました。本地域では、活用以前に地域全体のネットワーク環境の構築が急務という状況です。さらに、それらを活用してどのような授業を想定するか、教育委員会と学校現場の教員の双方がイメージを持つことが大切と考えます。本記事は両者を刺激する内容で、参考になりました。(沖縄県)

◎連載「アクティブ・ラーニング実践講座」の埼玉県戸田市立戸田第二小学校の事例は、タブレット端末が全員分あるからこそできる取り組みかもしれません。その中で、学級経営の重要性への意識が目を見ました。健全な意見交換に向けて、互いを信頼、尊重できる学習基盤や、顔を向き合わせてコミュニケーションする場面設定の重要性など、示唆に富むものだったと思います。(北海道)

◎連載の埼玉県戸田市立戸田第二小学校の事例は、授業づくりの工夫が、とても分かりやすかったです。ICT機器には予算が関係するので、そのまま本地域で実現することはできませんが、「コーディネート発問」を始めとした発問の工夫は、日々の授業改善をメインとした校内研修で十分取り組みます。今後の参考にしていきます。(北海道)

◎巻末記事「私の仕事 私の願い」にあった英語学習で、「小学校での外国語活動で高まった意欲を、中学校が引き継いで体系的な指導で学力として高め、高校に渡す」という中学校の役割について、まさにその通りだと感じました。本市でもこの考え方を生かしていきたいと思います。(茨城県)

編集後記

特集では、研究指定校を中心に、小学校英語の先行事例を取材してきました。今回の取材では、どの学校でも先生方が同じことを話されていたのがとても印象的でした。例えば、「授業づくりは必然性が大切」「英語力よりも英語を一生懸命話そうとする姿勢が大切」「児童のことをよく知っている担任の先生こそ英語の授業をすべき」などは、どの先生も声をそろえて力説されていました。英語力に自信のない先生方にもぜひ、これらの意見を参考にして、臆せず取り組んでいただければと思います。(岡本)

VIEW21 教育委員会版 2017 Vol.2 2017年8月15日発行/通巻第10号

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 二宮良太
撮影協力 荒川潤、谷口哲、松原誠、
ヤマグチイッキ

◎お問い合わせ先
フリーダイヤル 0120-350455
〒700-8686
岡山市北区南方3-7-17

子どもが自立して社会に巣立つまで、 部局や学校種を超えて 子どもや保護者を支援していく

群馬県 草津町教育委員会 教育長 中澤 隆

入職してから温泉課や総務課など様々な行政職を経験し、町を支えているのは「人」なのだとつくづく感じています。今、その人づくりに直接かかわる教育職に携わる中で、子どもが自立してしっかり生活できるようになるための支援が最も重要だと考え、施策を進めています。

中でも力を入れているのが、2012年度に始めた「育ちと学びを支えるネットワーク事業」です。保健部局が健診などで把握した子ども個々の情報を教育部局が受け継ぎ、課題には医師、臨床心理士、助産師、保健師らの専門家チームで対応します。乳幼児期から継続して見ているからこそ、適切な支援を判断できますし、保護者も専門家の助言に納得し、安心して子育てを行えます。これまで情報を蓄積してきた小学5年生までの中に、不登校の児童はいません。

保護者が1人で問題を抱えこまないよう、相談窓口を1本化したことで、すぐ相談してもらえるようになり、問題が深刻化する前に対応できるようになりました。さらに、2年前からは、高校生への就学費補助を始めたことで、生徒が高校を中退した時にも、町としてすぐに必要な支援ができるようになりました。小さな自治体だからこそ、すべての子どもの状況を把握して学校間を橋渡しし、社会に巣立つまで支援を継続していきたいという思いがあります。

温泉観光地という地域性を生かした教育も、重視しています。草津町ではここ数年で外国人観光客が増え、それに対応した雇用が増えてきています。温泉街は通学路になっており、子どもたちは、日本人だけでなく外国人観光客にも話しかけられることがあります。そうした環境を踏まえ、英語で町を紹介できる力の育成を図っています。ALTを、小・中学校だけでなく幼稚園にも配置するとともに、中学校の英語科教員が小学校の英語指導にも入れるようにしました。ここでも、幼稚園から中学校までの継続した支援を大切にしています。

子どもが楽しく学校へ行き、落ち着いて勉強に取り組む。それだけで、保護者の心配事が減り、教員も安心して指導ができ、それが子どもの力をさらに伸ばすことにつながっていきます。行政が部局を超えて連携し、子どもの自立への道と、それを支える人々を、あらゆる側面から支援していきたいと考えています。



なかざわ・たかし◎群馬県立中之条高校卒業後、草津町役場に入職。温泉課長、総務課長などを経て、2011年度から現職。

「育ちと学びを支えるネットワーク事業」の中心となるのが、就学前に行う5歳児運動健診だ。子ども一人ひとりの発達特性を把握して学校教育へ橋渡しするとともに、保護者を支援するための講演会や育児相談も充実させている。



群馬県立女子大学と連携し、小学5・6年生の外国語活動の副教材として「KUSATSU NOTE」を作成。草津町の名所や祭り、名物などを英語で学べる内容となっている。